



IMMIGRATION MUSEUM TOKYO

10TH ANNIVERSARY BOOK



本書は、2020年度に「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」* が「イミグレーション・ミュージアム・東京（通称：IMM東京）」の一環として公開した特設ウェブサイト「オンライン美術館・わたしたちはみえている ― 日本に暮らす海外ルーツのひと」とのコンテンツを素材に編集しています。本企画は当初、リアルな場での展覧会を目指していましたが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響を受け、開催形態をオンラインへと転換しました。特設ウェブサイトは、3つの部門（ゲストアーティスト／公募展／国内団体紹介）と、市民メンバーの活動報告、ブログ、ライブラリで構成され、アートの文脈を中心に、現代日本が迎える多文化社会の一側面を伝えるものとなりました。

This publication is an edited compilation of materials from the online museum “Art Museum • ‘Seeing Us: Living in Japan with Roots Overseas’”, released by Art Access Adachi: Downtown Senju - Connecting through Sound Art as part of Immigration Museum Tokyo (IMM Tokyo). This project was initially planned as an in-person exhibition but was moved online as a precaution against the novel coronavirus. While focusing on the context of art, the special website conveys one side of the multicultural society that contemporary Japan welcomes. The website consists of three sections (one for guest artists, an open call exhibition, and an exhibition of activities) as well as reports on citizen-led activities, blog entries, and a library.



[公開期間] 2020年12月5日 ― 2021年3月14日

[企画運営] 西川 汐、櫻井駿介、吉田武司、今井迪代、長尾聡子、三浦万奈、木村 楓、楊 淳婷、楊 天帥、韓 河羅、伊東葉南、権 祥海

***アートアクセスあだち 音まち千住の縁（通称：音まち）**

アートを通じた新たなコミュニケーション（縁）を生み出すことをめざす市民参加型のアートプロジェクトです。足立区千住地域を中心に、市民とアーティストが協働して、「音」をテーマに様々なプログラムをまちなかで展開しています。

主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、東京藝術大学音楽学部・大学院国際芸術創造研究科、特定非営利活動法人音まち計画、足立区

※「音まち」は「東京アートポイント計画」として実施しています。

※ オンライン美術館は東京藝大「I LOVE YOU」プロジェクト 2020 の一環として行われました。

（助成：令和2年度日本博を契機とする文化資源コンテンツ創成事業）

[Period] 2020.12.5 ― 2021.3.14

[Planning & Operations] Yu Nishikawa, Shunsuke Sakurai, Takeshi Yoshida, Michiyo Imai, Satoko Nagao, Mana Miura, Kaede Kimura, Chunting Yang, Tinsui Yeung, Harah Han, Mana Ito, Sanghae Kwon

*** Art Access Adachi: Downtown Senju - Connecting through Sound Art (OTOMACHI PROJECT)**

Based in the Senju district of Tokyo's Adachi City, this initiative features a diverse range of programs on the theme of sound, working in partnership with leading figures in the local community with the aim of creating new connections and communication through art.

Organized by Tokyo Metropolitan Government / Arts Council Tokyo (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture) / Tokyo University of the Arts (Faculty of Music, Graduate School of Global Arts) / Non-Profit Organization OTOMACHI PROJECT / Adachi City

※ OTOMACHI is being implemented as a “Tokyo Art Point Project”.

※ The online art museum was conducted as part of the TOKYO GEIDAI “I LOVE YOU” project 2020. (Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan, Fiscal Year 2020)

本書は、公立大学法人秋田公立美術大学「令和2年度競争的研究費」により印刷されています。

This publication is printed with the support of Akita University of Art (2020 Akita University of Art Competitive Research Grant).

IMMIGRATION MUSEUM TOKYO 10TH ANNIVERSARY BOOK

イミグレーション・ミュージアム・東京という活動
THE ACTIVITIES OF IMMIGRATION MUSEUM TOKYO
岩井成昭 / Shigeaki Iwai

06

[寄稿 / CONTRIBUTION]

隣人への共感の眼差し
A FOND LOOK TO OUR NEIGHBORS
原 万希子 / Makiko Hara

14

海外ルーツを持つ表現者たち
ARTISTIC EXPRESSIONS OF PEOPLE
WITH ROOTS OVERSEAS

20

多文化社会に向き合う団体紹介
INTRODUCING ORGANIZATIONS ENGAGED
IN MULTICULTURAL SOCIETY

28

現代アーティストたちの眼差し
PERSPECTIVES OF CONTEMPORARY ARTISTS

42

IMM東京に関わる市民メンバーたち
CITIZEN MEMBERS INVOLVED IN IMM TOKYO

56

[寄稿 / CONTRIBUTION]

千住がパリ？ — IMM東京の驚きと歓び
SENJU AS PARIS?
THE WONDER AND JOY OF IMM TOKYO
熊倉純子 / Sumiko Kumakura

66

岩井成昭 美術家 / イミグレーション・ミュージアム・東京 ディレクター

1-

のっけから、少々硬い話題で面食らう方も多いかもしれない。それでも、はじめに国内の動きを記しておきたい。法務省によれば、2019年末日本全国で2,933,137人の在留外国人の居住が報告されており、そのうち6割弱の166万人が労働者である。同年の4月には入国管理法の改正が行われ、これまでの技能実習制度に特定技能外国人として農業、介護、宿泊などを含む14分野を新たに加え、以降5年間で34万人以上の受け入れを目標とした。しかし2020年はCOVID-19の世界的パンデミックにより前年比 -1.6%（総数2,885,904人／同年6月末調査）の減少となった。これはCOVID-19が要因であるには違いないが、国内事情を案ずると、このまま外国人の減少傾向が進みかねない状況が見えてくる。なぜなら、世界は日本が外国人を受け入れる動機の危うさと、功利的な態度に気づきはじめてからだ。筆者がこの文章を記している2021年2月末、政府は労働力として特定技能外国人を増やそうと腐心する一方で、人権侵害が国際問題化している入管収容施設の管理を強め、難民申請の可能性を狭め、強制送還に応じない外国人に刑事罰を与える法案を通そうとしている。このような政策の大きな矛盾が国際的な評価として、この国にどのように返ってくるのか。近い将来にそれは明白になるだろう。2020年はコロナ禍において、私たちの社会に潜在していた排他性が、うわべだけの寛容性を凌駕した年として記憶されるのではないだろうか。

2-

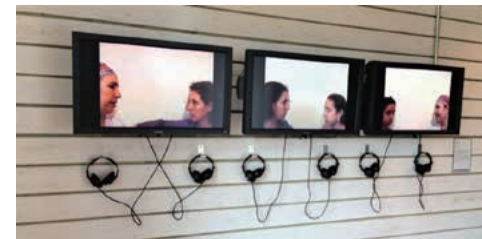
歴史的に移民を受容して形成され、多文化主義を取り入れた国家や地域には、移民が社会に与える希望と存在意義を明白にし、地域住民との融和を促すために、それぞれの移住の目的、方法、過程などの歴史をはじめ、移住後の処遇、生活、文化背景などを紹介する施設がある。それがイミグレーション・ミュージアムである。これに類似する施設は世界各地に存在するが、本稿で言及するのは、固有のエスニシティの保持や貢献を紹介する施設ではなく、多文化社会に生きる市民を表象し、同時に彼らを利用者とする、いわば「多文化的イミグレーション・ミュージアム（以下、ミュージアム）」である。ここでは常設展示以外にも、移民アーティストによる企画展、多文化教育普及活動、人権セミナーや移民同士の交流を促すフェスティバルが定期的に開催される等、多様な機能を持つ。特筆すべきは、この施設は単なるギャラリーでは



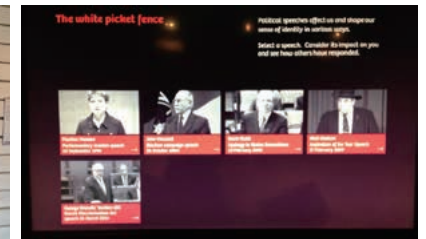
Immigration Museum Melbourne

なく、ここを訪れる移民は自身のアイデンティティと存在意義が公的に承認され、安心を得る居場所としても存在することである。国内において、このような機能を持つミュージアムは今のところ存在しない。

これらのミュージアムには幾つかの共通する特徴がある。第一に、展示構成や作品を現代アーティストに委託し、様々な手法を援用して移民の歴史や現状に光を当てていることだ。パリの国立移民史博物館（Musée de l'histoire de l'immigration）に所蔵されている、アルジェリア系移民アーティスト Zineb Sedira の作品《母語》は、その好例である。本作は、移民一世としての祖母、二世としての母、三世としての娘が、それぞれ異なる「母語」によって対話せざるを得ない状態を視覚化した3チャンネルのビデオ・インスタレーションである。そこには、移民家族に起きている世代間コミュニケーションの深刻な断層が浮かび上がる。同ミュージアムは「道しるべ」と呼ばれる歴史的な展示と共存するように、これら移民アーティストの作品を随所に展示している。第二に、「特定の文化を固定的に語らない配慮」がある。これは、2019年に国際博物館会議（ICOM）における提唱（決議には至らず）の一部「過去と未来についての批判的な対話のための、民主化を促し、包摂的で、様々な声に耳を傾ける空間」につながる観点だといえよう。過去の博物館や美術館による文化的ステレオタイプに対する配慮欠如への反省から、今後それを積極的に回避すること。さらに、次々と現れる新しいステレオタイプを監視する機能を持つことが、ミュージアムの役割であるとした。一方で、マスメディアとの比較によるミュージアムの役割もある。一般的にメディアは、移民・難民に対して否定的な側面を報道しがちであるが、ミュージアムの役割は、より多角的で偏向の少ない視点を提供できるはずである。メルボルンのミュージアムにおける「The white picket fence」というコーナーでは、豪州の政治家たちの移民問題に関するスピーチを自由に選択して聴くことができるが、解釈は完全に観客自身に委ねられている。ここでは、文化的、政治的に成熟し、リテラシー能力を持った観客を想定していることが明らかである。



Zineb Sedira, *Mother Tongue*, 2002



The white picket fence, Immigration Museum Melbourne

ミュージアムのコンテンツは現在進行形であり、社会の変化に柔軟に対応する必要があるが、常に適切な解答を導き出すことは困難であるため、むしろそれを露呈させることで健全性を保っている。困難さの一例としては、ミュージアムの周辺地域から複数のエスニック・グループに同一のテーマを投げかけ、それに基づいて提供された素材で展示を構成するようなケースである。ここでは、各グループがたとえ偏っていたり粉飾させた情報を提供しても、ミュージアムのキュレーション・チームは、それを尊重せざるを得ないというジレンマに陥る。また、近年は旧来の博物誌的な展示に代わって、移民や難民個人々の語りにフォーカスした映像や音声のオーラル・ヒストリーが展示の主流とされるが、その内容が劇的であり刺激的であるほどに、事実が個人の特殊な経験として回収されてしまう恐れがあり、また観客も無意識に過剰なドラマを求めてしまう点が指摘されている。

3-

諸外国のイミグレーション・ミュージアムを国内で参照しようとするとき、移民の定義は避けて通れない。在留外国人の増加にも関わらず、公的な「移民」が存在しない日本は、法整備もされておらず、移民を定義づけることができない。移民の存在を公的に認めることが前提のミュージアム機能をそのまま国内に導入することができないのだ。では、何処から始めるべきだろうか？ 2010年に開始した「イミグレーション・ミュージアム・東京（以下、IMM東京）」の場合は、以下「3つの視座」を活動の基準においている。

Phase:1 「適応」 “Adaptation / Adjustment” 日本における生活および不自由さの克服

Phase:2 「保持」 “Preservation” オリジナルの文化と生活様式をいかに保つのか

Phase:3 「融合」 “Fusion” 妥協や消極的变化を含めた無意識の融合

これらの視座は、移住を始めた人びとの流動的に変化する生活に寄りそうものだ。言うまでもなく、彼らの母国の、そして日本の独自文化をお互い理解し合うことは大切だ。しかし、異なる2つ以上の文化が摩擦や衝突を回避しながらいかに共存を探ることができるのか？ この点にこそ、人びとの創造性が表出するのではないか。IMM東京が求めるのは、未分化なプロセスに現れる「人智」であり、人びとが制度に依存せずとも、フラットで相互交換的な関係を作りあげる「希望」である。

IMM東京は発足以来、拠点や運営組織の構成、予算の捻出など、様々に変化する条件に随時適応し、試行錯誤を繰り返しながら活動を続けてきた。活動10年目にあたる2020年は奇し



展覧会「ニューカマーズ・ビュー 2012 / NEWCOMER'S VIEW 2012」



《ブルースト現象@東京》
L'effet Proust de Tokyo (展覧会「不思議な出会い / Fascinating Encounters」)

くも東京オリンピック・パラリンピックイヤーとして国際的・多文化的な話題が社会に浸透すると思われたことから、同年にこれまでの集大成ともいえる展覧会を構想した。その後は周知のようにCOVID-19の感染が拡大し、オリンピック・パラリンピックはもとより、多くの計画が変更を余儀なくされた。しかし、この混乱の中でIMM東京は立ち止まって考えることができた。今、本当に必要なアクションは何であろうか？ 本書には、その答えに対するヒントで溢れている。

岩井成昭

1990年代から、国内外の多文化環境をテーマに作品を制作し、国際展やアーティスト・イン・レジデンスを中心に発表する。2010年よりプロジェクト・ベースのイミグレーション・ミュージアム・東京を始動。秋田公立美術大学教授。

Shigeaki Iwai Artist / Director, Immigration Museum Tokyo

* The following text is a summary of the Japanese text.

First, I would like to note the current situation in this country, Japan. According to the Ministry of Justice, 2,885,904 foreign residents were reported living in Japan at the end of June 2020, of which just under 60%, or about 1.66 million, were workers. In April of the previous year, Japan's immigration law was amended to include 14 new industry fields such as agriculture, long-term care, and accommodation under the status of "Specified Skilled Worker" with the goal of accepting more than 340,000 people over the following 5 years. However, while the government is making large strides towards increasing the number of foreign workers, they are also strengthening the administrative capacity of immigration detention centers, where human rights violations have become an international concern; narrowing possibilities for refugee applications; and attempting to pass a bill for the criminal punishment of foreigners who do not accept deportation. How will these policy contradictions reflect on Japan's future on both a domestic and international stage? In the midst of the coronavirus pandemic, 2020 may end up being remembered as the year when social exclusion overcame tolerance.

In nations and regions that have historically embraced immigrants and adopted multiculturalism, there are facilities that make clear the hope and meaning of existence that immigrants convey to society. These facilities promote harmony between people by introducing the varied histories behind the reasons, methods and processes of immigration, as well as the current treatment, ways of life and backgrounds of immigrant people. Those facilities are referred to as "multicultural immigration museums". Importantly, those facilities are not just museums, but also a safe space where immigrants can affirm their identity and meaning of existence in a different country. Currently, there is no such museum in Japan.

When referencing those overseas immigration museums in the context of Japan, the challenge of defining "immigrants" cannot be avoided. Despite an increase in foreign residents, Japan has no official "immigrants", nor any official legislation that can define them. Because of this, simply imitating or transplanting the function of those overseas museums to Japan would be meaningless. So, what is the best approach? In the case of Immigration Museum Tokyo (IMM Tokyo), the following "three perspectives" form the basis of our activity.

Phase 1: "Adaptation/Adjustment" Overcoming hardship and life challenges in Japan

Phase 2: "Preservation" Maintaining one's original culture and way of life

Phase 3: "Fusion" Unconscious integration, including compromise and passive change

These perspectives shed light on the fluid lives of people with roots in different homelands. While mutual understanding between the original culture of an immigrant and that of Japan is important, in actuality, the process of change that occurs between two or more cultures as they avoid friction and conflict can yield a forward-thinking sense of creativity. What IMM Tokyo seeks is the "human wisdom" that emerges from that process and the "hope" that arises when people are placed in equal and reciprocal relationships.

With this in mind, the activities of IMM Tokyo have continued through repeated trial and error in response to various changes in our mode of operation, base of activities and budget. As our 10th anniversary miraculously coincided with the Tokyo Olympics and Paralympics in 2020, which seemed to beckon opportunities for society to fill with international and multicultural topics, we envisioned an exhibition to celebrate 10 years of our activity. However, the spread of COVID-19 forced all sorts of plans to change, not the least of which was the Olympics and Paralympics. Yet, amidst the commotion, we at IMM Tokyo could stop and think about what kinds of actions are really needed now. This publication is full of hints toward answering that question.

Shigeaki Iwai

Since the 1990s, he has been working on multicultural issues in Japan and abroad, and has shown his works mainly in international exhibitions and "artist-in-residence". In 2010, he started the project-based Immigration Museum Tokyo. He is a professor at Akita University of Art.

これまでの歩み

IMM 東京の 10 年にわたる活動の一部をまとめています。

| 2010 | 2011 | 2012 | 2013 | 2014 | 2015 | 2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020 | 2021 | | | | |
|------------------------|------|------|------|-------------------------|------|------|------|--------------------------------------|------|------|------|---|--|--|--|
| 小金井市における活動 | | | | 足立区における活動① | | | | 足立区における活動② | | | | 足立区における活動③ | | | |
| 市民によるコミュニケーション・プロジェクト | | | | 市民によるコミュニケーション・プロジェクト | | | | 梅田カトリック教会に集う フィリピン・コミュニティを中心とした活動 | | | | 「美術館・わたしたちはみえている」 に向けた活動 | | | |
| ニューカマーズ・ビュー2011 展示会 | | | | ニューカマーズ・ビュー2012 展示会 | | | | ニューカマーズ・ビュー2013 展示会 | | | | 「オンライン美術館・わたしたちはみえている」 特設ウェブサイト ※中止 | | | |
| | | | | 多文化共生について考える トークシリーズ | | | | 多文化共生を考える 連続勉強会 | | | | フィリピンボ!!ザ・ファイナル パーティー | | | |
| | | | | 普段着のできごと 展示会 | | | | ケント・ダールが歩いた千住 展示会 | | | | 日豪の対話 シンポジウム | | | |
| | | | | 出会いのかたち 展示会 | | | | マキラ イベント | | | | レクチャーシリーズ | | | |
| | | | | 不思議な出会い 展示会 | | | | | | | | ※中止 | | | |

小金井市における活動：市民によるコミュニケーション・プロジェクト
(2010.6 - 2013.3)
Activities in Koganei : Communication Projects by Citizens
(June 2010 - March 2013)

● 2011.3.26～4.9
展覧会 Exhibition 「ニューカマーズ・ビュ 2011 / NEWCOMERS' VUE 2011」
会場 Venue：小金井アートスポットシャトー 2F / Koganei Art Spot Chateau 2F
市民展 Exhibiting Citizens：岸真理子 Mariko Kishi、牧美和子 Miwako Maki、島永京子 Kyoko Tominaga
絵と書画 Show Project (We are same towns)：黒木章 Kou Kuroki
アートディレクション (Art Direction)：土屋トウキョウ Talk Guest：藤山ヅル Zuru Kageyama (ART LAB OVA 主催 / Leader)
主催 Host：小金井アートフル・アクション！実行委員会 / Koganei Artful action! Executive Committee

● 2012.5.17 ~ 3.31
展覧会 Exhibition「ニューカマーズ・ビュ 2012 / NEWCOMER'S VIEW 2012」
会場 Venue：小金井アートスポーツシャトル 2F / Koganei Art Sports Chateau 2F
市民展示 Exhibiting Citizens：大久保藍乃 Aino Okubo、平田栄美 Eri Hirata、富田美穂 Mitsu Miyashita、山中元 Gen Yamanaka、北川麻衣子 Maki Kitagawa
出演 Artists：吉岡 誠二 Jisshu Jiga Gershten (童謡歌手 / Japanese Nursery Rhymes Singer) 田室寿見子 Sumiko Tamuro (Sui Titulo 代表 / Representative)
主催 Host：小金井アートフル・アクション！実行委員会 / Koganei Artful action! Executive Committee

● 2013.3.3-3.23
展覧会 Exhibition「ニューカマーズ・ビュ 2013 / NEWCOMER'S VIEW 2013」
 会場 Venue：小金井アートスポットシャトー 2F / Koganei Art Spot
 市役所展 Exhibiting Cities：北川町市 Maiko Kitagawa、古田裕美 Hiromi Furuta、富田陽香 Haruka Tomita
 ゲスト展 Guest Artists：リリマリア・マズード・アンサリ Golmaryam Masood Ansari、リウルー・シャン Liu Lushan、ジェイ・ハムプリーズ Jamie Humphreys
 主催 Host：小金井アート・プロジェクト実行委員会 / Koganei Art Project/Execution Committee

足立区における活動 ①：市民によるコミュニケーション・プロジェクト
(2013.5 - 2016.6)
Activities in Adachi ①：Communication Projects by Citizens
(May 2013 - June 2016)

● 2014.2.15~2.23
 展覧会 Exhibition 「不思議な出会い / Fascinating Encounters」
 会場 Venue : 日の出町団地スタジオ / Studio Hinode apartment
 展示 Participants : 上本竜平 Ryuhei Uemoto + カタノワ・カテリーナ
 Katanova Kateryna、井出友実 Tomomi Ide + 鶴巻俊治 Toshiharu

Tsurumaki + 伴優香子 Yukako Ban、岡野勇仁 Eugene Okano + 佐藤友梨 Yuri Sato + 宮本一行 Kazuyuki Miyamoto
トークゲスト Talk Guests: 大橋史恵 Fumie Ohashi・牧野冬生 Fuyuki Makino (早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教員 / Assistant Professor, Waseda University Graduate School of Asia-Pacific Studies)

● 2015.2.12~2.15
展覧会 Exhibition「出会いのかたち / The Form of Encounters」
 会場 Venues: 日の出スタジオ / Studio Hinode apartment (展示 / Exhibition)、カトリック梅田教会 / Umeda Catholic Church (パフォーマンス&トーク / Performances & Talk)
 展示 Participants: 井川友美 Tomomi Ide + 郷田彩衣 Iroha Goda、
 鶴巻俊治 Toshiharu Tsurumaki、橋岡由紀子 Yukiko Hashima、宮本
 行一 Kazuyuki Miyamoto、美聲雄兵衛 Hyeon-sik Kang
 パフォーマンス Performance: 上本竜平 Ryuhei Uemoto + 小形真
 莉江 Marie Ogata
 アートワーク Talk 主催者: 海老原周子 Shuko Ebihara (新橋ア
 トワーク代表 / Representative of Shinjuku Art Project)、魏
 玲 Wei Ting (新橋アートプロジェクト / Shinjuku Art Project)、魏
 ラメイ・アレック Alec LeMay (上智大学言語教育センター /
 Sophia University's Center for Language, Education and
 Research)、川博行 Hiroyuki Arakawa (カトリック梅田協会主
 司祭 / Umeda Catholic Church, Pastor)

● 2015.9.5~9.23
展覧会 Exhibition「普段着のできごと / Everyday happenings」
 会場 Venue：足立区関屋 Sekiya, Adachi Ward
 展示 Participants：森本菜穂 Naho Morimoto、美賢植 Hyeon-sik Kang、宮本一行 Kazuyuki Miyamoto、日比野桃子 Momoko Hibino、宮本一行 Kazuyuki Miyamoto、北野留美 Rumi Kitano
 + 泉祐子 Yuku Izumi + 山田泰子 Yasuko Yamada
 パフォーマンス Performance：林賢熙 Hyun-Mook Lim

● 2015.10.18~2016.1.23
トークシリーズ Talk Series「多文化共生について考える / Thinking about Multicultural Coexistence」

基礎編 General Version

①会場 Venue: フトリツ 梅田教会 / Umeda Catholic Church
ゲスト Guest: 遠原良和 Yoshikazu Shiobara
(慶応義塾大学 / Keio University)

③会場 Venue: 第一ビル5F / Daiichi Building 5F
ゲスト Guest: アンジェロ・イシ Angelo Ishi
(武蔵大学 / Musashi University)

④会場 Venue: 学びピア21 / Manabi Pia 21
ゲスト Guest: 高畑 尊 Sachī Takahata
(韓国国立大学 / University of Shizuoka)

芸術編 Arts-Focused Version
 ①会場 Venue: 第一ビル5F / Daiichi Building 5F
 ゲスト Guest: 田宮寿見子 Sumiko Tamuro (演出家 / Director)
 ②会場 Venue: 帝京科学大学 / TEIKYO University of Science
 上映 Screening: (ドキュメンタリー映画 Documentary Film
 「HAFU (ハーフ)」 (2013)
 ゲスト Guests: 矢野デビッド David Yano. 須本エドワード Edward
 Sumoto

OUR HISTORY SO FAR

A summary of some of IMM Tokyo's activities over the past ten years.

足立区における活動②

梅田カトリック教会に集う
フィリピン・コミュニティを中心とした活動

多文化共生を考える
連続船展会

日豪の対話
シンポジウム

マキララ
イベント

マキララ
イベント

ケント・ダールが歩いた千住
展覧会

足立区における活動 ②：梅田カトリック教会に集うフィリピン・コミュニティを中心とした活動
(2016.9 - 2019.2)
Activities in Adachi ②: Activities Centered on the Filipino Community of Umeda Catholic Church
(September 2016 - February 2019)

● 2016.9.10～19
イベント Event「フィリピンからの、ひとりひとり マキララー 知り、会い、踊るー / Individuals from the Philippines MAKILALA to know, Meet and Dance」
映像展 Video Installation「Their history, to be our story」
会場 Venue：仲町の家 / NAKACHO House
構成・演出 Director：阿部菜穂 Hatsumi Abe
映像 Video：富田了平 Ryohi Tomita
会場構成 Spatial Design：日本大学在籍藤也研究室 Shinya Satoh
Studio: Nihon University
パーティー Party「フィリパボ!! / Filipa-po-po!!」
会場 Venue：東京藝術大学平住校地 / Seiju Campus, Tokyo University of the Arts
プロジェクトリーダー Project Leader：森本菜穂 Naho Morimoto

● 展覧会 10.10-10.17
 展覧会 Exhibition「銭湯哀歌、人情屋台、消えゆく昭和 ～Kent・ダールが歩いた千住～ / Bath house elegy, humane pull-car, and a vanishing view of Showa era: Senju, the town where Kent Dahl had walked around」
 会場 Venues: 仲町の家 (ほか) / NAKACHO House and others
 写真 Photo: Kent・ダール Kent.W Dahl
 キュレーション Curation: 岩井成昭 Shigeaki Iwai
 トークゲスト Talk Guests: 住友文彦 Fumihiko Sumitomo、熊倉純子 Sumiko Kumakura、友橋正斗 Satoko Funahashi

● 2017.2.22～8.7
イベント Event「フィリピンからの、ひとりひとり マキララー 知り、会い、踊る / Individuals from the Philippines MAKILALA to Know, Meet and Dance」
展示展覧 Video Installation「Their history, to be our story」
(再展示 / Re-Exhibited)
会場 Venue：仲町の家 / NAKACHO House
パーティー Party「フィリピンバオ!! / Filipa-pi-po!!」
会場 Venue：東京藝術大学千住校地 / Senju Campus, Tokyo University of the Arts

● 2017.10.15
シンポジウム Symposium / 日豪の対話：文化多様性に向けたコミュニティ・エンゲージメント / Immigration Museum: Australia-Japan Dialogue towards the Enhancement of Cultural Diversity
会場 Venue：東京藝術大学上野校地 / Ueno Campus, Tokyo University of the Arts
登壇者 Speakers：リダ・スプロール Linda Sproul、ジャン・モロイ Jan Molloy、マギー・ワトソン Maggie Watson、アリサ・ブンス Alice Pung、エルフシゲ・ザ・ライオン Le Fresh The Lion（以上、イミグレーション・ミュージアム・メルボルン / The above from Immigration Museum, Melbourne）、村田麻里子 Mariko Murata、野島純一 Junichi Norota、若井成昭 Koichi Iwabuchi、岩井成昭 Shigeaki Iwai、熊倉純子 Sumiko Kumakura

● 2017.12.8～2018.1.14
連続公演企画 Lecture Series 「多文化共生を考える / Multicultural Coexistence」
会場 Venue: 仲町の家 / NAKACHO House
ゲスト Guests: 樋口実作 Mimasaka Higuchi (日本ムスリム協会 / Japan Muslim Association), 寛川柳一 Hirokazu Oikawa (元杏林大学 / formerly of Kyorin University), 戸割田彰子 Akiko Yugeta (立教大学大学院修士 / Master's Graduate, Rikkyo University)

● 2019.2.16
パーティー Party「フィリパビポ!! ザ・ファイナル / Filipa-pi-po!!
The Final」
会場 Venue: 東京藝術大学千住校地 / Senju Campus, Tokyo University
of the Arts

足立区における活動 ③：「美術館・わたしたちはみえてい
る 日本に暮らす海外ルーツの人びと」に向けた活動
(2019.4 -)
Activities in Adachi ③: Activities for "Art Museum・Seeing
Us: Living in Japan with Roots Overseas"
(April 2019 -)

● 2019.7.27~12.14
レクチャーシリーズ Lecture Series「多文化社会におけるアートのチカラ / The power of art in a multicultural society」
会場 Venue : 東京藝術大学千代田校地 / Senju Campus, Tokyo University of the Arts
ゲスト Guests : 望月優大 Hiroki Mochizuki (『ユウゴン複雑紀行』編集長 / 'NIPPON FUKUZAATSU KIKOU' Editor in Chief)、ハン・ドンヒョン Tong-hyon Han (社会学者 / Sociologist)、李晶玉 JongOk Ri (アーティスト / Artist)、滝澤朝子 Asako Taki (NPO法人ARDA事務局員 / Executive Director, ARDA)、山浦彬仁 Yoshihito Yamaura (NHK制作文化・福祉番組部ディレクター / Director, Program Production Department, NHK)、名越啓介 Keisuke Nagoshi (フォトグラファー / Photographer)、長島雄 Kaku Nagashima (ドラマツルク / Dramaturge)

● 2020
展覧会 Exhibition 「美術館・わたしたちはみえている ― 日本に暮らす
海外ルーツの人びと / Art Museum・Seeing Us: Living in Japan
with Roots Overseas」
… 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の影響を受け中止を決定。
/ We decided to cancel this event in order to prevent the
spread of COVID-19.

● 2020.12.5~2021.3.14
特設ウェブサイト Special Website「オンライン美術館・わたしたちはみえているー日本に暮らす海外ルーツの人びと / Online Art Museum・Seeing Us: Living in Japan with Roots Overseas」
(<https://immigration-museum-tokyo.com/>)

隣人への共感の眼差し

原 万希子 インディペンデントキュレーター / バンクーバー在住

今から四半世紀前の1995年の秋、カナダのトロント国際交流基金事務所の発足を記念して、パワープラントで開催された大規模な日本祭の一環の日本のコンテンポラリーアートのグループ展「The Age of Anxiety」。私はその事前リサーチのアシスタントと現地での展示コーディネートをしていて、現 イミグレーション・ミュージアム・東京（以下、IMM東京）ディレクターの岩井成昭さん（以下、敬称略）はその出品アーティストの一人だった。それが私と岩井との初めての仕事になる。

岩井が出品したのは《100 Hummings》というタイトルのサウンドインスタレーションである。当時、東京で最も多くの外国籍の人びとが生活していた新宿百人町で、外国人労働者の人びとの口ずさむ故郷の鼻歌をサンプリングし、スピーカーから流しサボテンに聴かせるというこのインスタレーションは、同じグループ展に出品していた柳幸典の、アクリルボックスに色砂で作られた世界国旗を、チューブを伝って移動する蟻が少しずつ壊してゆくという作品《アントファームプロジェクト》と合わせて、世紀末の日本における移動や移民をめぐる社会問題を扱う作品としてキュレーターが選んだと記憶している。しかし、岩井と柳の扱っている「移動」は本質的に異なる。当時ニューヨークに住み、国際的なアートシーンで発表をしていた柳は、世界規模で現行する移民の波がいずれ国家という枠組みを崩す力になるかもしれないというグローバル化現象に着目し記号化した。一方東京を拠点にしていた岩井の作品からは、これとは正反対の共感の眼差しを感じた。岩井の《100 Hummings》は、彼と同じ東京という都市に住む不可視化された隣人に向けられていた。日本社会にあたかも存在していないような扱いを受けていた外国籍の人びと。岩井の眼差しは、おそらく日本を離れ海外生活を経験して、彼自身が異国でマイノリティとしての生活を体験したことで、東京に暮らす社会の周辺もしくは底辺で生きる人びと、同時代の隣人への共感に基づいているように思えた。

彼と出会った1995年という年は、阪神・淡路大震災、オウム真理教の地下鉄サリン事件などの世紀末的な社会を震撼させる事件が立て続けに起こり、日本全体が閉塞感に覆われていた。私自身も、それ以前のコンテンポラリーアートワールドの空騒ぎのようなお祭りモードから一転して、社会的な問題を考えるようになっていた時期だった。そのような時代で自分が批判的にアートに関わり続けるために、この国を一度離れたいと思うようになり、2年後にモントリオールの大学に編入し、カナダの移民になった。カナダは建国150年足らずの若い国で1967年から多民族主義を政策に入れた、そもそもイギリスの植民地政策によって成立した移民国家だ。そのような移民文化の中で生きながら自身の文化的アイデンティティーも生き方も25年で大きく変わった。しかし四半世紀経った今でも、未だ自分はカナダ人ではなくカ

ナダに住む移民だという意識は変わらない。私のような自主移民だけでなく、亡命移民から二世や三世まで移民という人生を選ぶということは、それぞれ生い立ちや事情や状況が違っていても、何かのきっかけで生まれた国を離れ、別の土地で新しい人生を築き直すことである。その過去の文化や習慣から異なる文化への移行には、新しい人生と自由を手に入れる喜びとともに、祖国との別離、不条理、悲しみ、痛みや苦しみを伴う。それぞれにドラマがあり、時に生死を伴う危険があり、痛みと喜びとどちらも持ち合わせた豊かな物語がある。同様の体験を持った友人たちとの友情や連帯感、彼、彼女とシェアした物語が、今の自分の人生を支えてくれていることは日々感じ続けている。

2020年1月に岩井から聞いていたIMM東京10周年記念展の構想は、残念ながら新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のために変更を余儀なくされ、オンラインに切り替わった。そのニュースを聞いて一時は心が痛んだ。しかし年末に開館したオンライン美術館で過去の資料やそこにある物語を読みながら、10年という月日を経て築き上げてきたIMM東京の重層的な人のつながりが、場所や時間を超えて明確に可視化され広がっているのは、逆にすごいことではないかと思った。現実の社会空間では、この1年の間でコロナ禍を巡って人権の基盤が壊れそうなほど様々な問題が露わになった。移民の待遇の格差や差別、バッシングなどの問題は、日本国内だけでなく世界中に広がっている。そんな中で、オンラインを通じて出会った人びとが個々の問題と物語を共有し、対話することのできる可能性は、移民に限らず孤立し追い詰められながら生きている全ての人にひらかれている。たとえ今はバーチャルな空間だとしても、ここには私が25年前に感じた、岩井の隣人に対する共感の眼差しがあり、自分もその社会の一員であるという連帯感を共有したいという希望を見て取ることができる。

他者を理解することは簡単ではない。けれども誰も一人では生きていけないのだから、今生きている社会が生きづらいつと感じているなら、私たちはまず隣人に「一緒に変えてゆこうよ」と声をかけることからしか、何も変わっていかないのだ。

原 万希子

2007年にカナダ、バンクーバーの国際現代アジアアートセンター（Centre A）のチーフキュレーター就任。2013年に独立。90年代よりカナダとアジアを繋ぐアートプロジェクトを数多く手がける。2021年アルビン・バルキンド・キュレーター賞受賞。

A Fond Look to Our Neighbors

Makiko Hara Vancouver-based Independent Curator

A quarter-century ago, in the fall of 1995, a group exhibition of contemporary Japanese artists titled “The Age of Anxiety” was held as part of a large-scale Japan festival at The Power Plant to celebrate the inauguration of the Japan Foundation branch in Toronto, Canada. I was the research assistant and the exhibition coordinator for that exhibition, while Shigeaki Iwai, the current Director of Immigration Museum Tokyo (IMM Tokyo) was one of the exhibiting artists. That was the first time that Iwai and I worked together.

Iwai exhibited a sound installation titled “100 Hummings”. In Shinjuku Hyakunincho, where the largest number of foreign nationals were living in Tokyo at the time, this installation sampled foreign workers humming the songs of their hometowns and played them through speakers for cactus to listen to. I remember that the curators chose this artwork, along with “Ant Farm Project” by Yukinori Yanagi, shown in the same exhibition, which dealt with social issues surrounding migration and immigration in Japan at the end of the century, in which ants moving through a tube gradually destroy world flags made of colored sand in acrylic boxes. However, the “migration” that Iwai or Yanagi are dealing with are fundamentally different. Yanagi, who was living in New York and exhibiting in the international art scene at the time, focused on the phenomenon of globalization and symbolized the idea that the current wave of immigration on a global scale may eventually become a force that collapses the framework of the nation. On the other hand, the work of Iwai, who was based in Tokyo, gave me an opposite sense of empathy. Iwai’s “100 Hummings” was directed at his invisible neighbors in the same city of Tokyo. Those foreign nationals were treated as if they did not exist in Japanese society. Iwai’s gaze seemed to be based on his empathy for the people living on the periphery or at the bottom of society in Tokyo, his contemporaneous neighbors, perhaps because he had left Japan and lived abroad, experiencing life as a minority in a foreign country.

In 1995, the year I met him, the Great Hanshin-Awaji Earthquake, the Aum Shinrikyo cult gas attack on the subway, and other events that shook society at the end of the century were happening one after another, and the whole of Japan was covered with a sense of stagnation. That was when I myself began thinking about social issues, shifting from the festive mode in the contemporary art world. In order to continue my critical engagement with art in such a time, I wanted to leave the country, and two years later I transferred to a university in Montreal and later became an immigrant in Canada. Canada is a young country about 150 years old with a multiculturalism policy that began in 1967, though Canada is actually an immigrant nation established by colonial France and England. Living in such an immigrant culture, my own cultural identity and way of life have changed drastically over the past 25 years. However,

even after a quarter of a century, I still feel that I am not a Canadian but an immigrant living in Canada. Choosing to live as an immigrant—whether a voluntary immigrant like myself, an asylum-seeker, or even the second and third generation of immigrants — means leaving one’s country of birth for some reason and building a new life in another land, even if the background, circumstances or situation are different. The transition from the culture and customs of the past to a different culture is accompanied by the joy of a new life and freedom, as well as separation from one’s homeland, absurdity, sorrow, pain and suffering. Each immigrant’s story has its own drama, sometimes life-and-death risks, and a rich story of both pain and joy. Each day, I continue to feel that the friendship and solidarity with friends who have had similar experiences, and the stories I have shared with them have supported me in my current life.

Unfortunately, the idea of the IMM Tokyo 10th anniversary exhibition that Iwai had told me about in January 2020 had to be changed to prevent the spread of the novel coronavirus, and was switched online. I was temporarily heartbroken when I heard the news. However, as I read through the past archival materials and stories in the online museum that opened at the end of the year, I thought it was amazing that the multilayered human connections of IMM Tokyo, which have been built up over the past 10 years, are now clearly visible and spreading beyond place and time. In real social spaces, the pandemic has exposed various issues over this past year that could damage the foundation of human rights. Issues such as disparity in how immigrants are treated, discrimination and hate speech are spreading not only in Japan, but all over the world. Under these circumstances, the possibility for people to meet online, share each of their challenges and stories, and engage in dialogue is open not only to immigrants, but anyone who is living in isolation and trapped. Even if it is a virtual space now, I can see here Iwai’s empathetic gaze toward his neighbors, which I felt 25 years ago, and his hope to share a sense of solidarity as a member of this society.

Understanding others is never easy. However, no one can live alone, so if we feel that life is difficult, the only way we can change anything is by reaching out to our neighbors and saying, “Let’s change it together.”

Makiko Hara

She was appointed the Chief Curator of Centre A, International Centre for Contemporary Asian Art in Vancouver, Canada in 2007, and became independent in 2013. Since the 1990s, she has been involved in a number of art projects that connect Canada and Asia. She was awarded the Alvin Balkind Curator’s Prize in 2021.



ARTISTIC EXPRESSIONS PEOPLE WITH ROOTS OVERSEAS

OF

海外ルーツを持つ 表現者たち

With the aim of shining a spotlight on artists with roots overseas living in Japan, IMM Tokyo held an open call for artwork from people of various age groups, careers and nationalities within Japan.

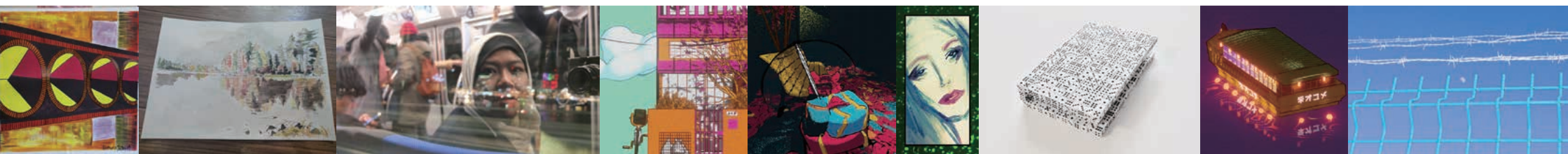
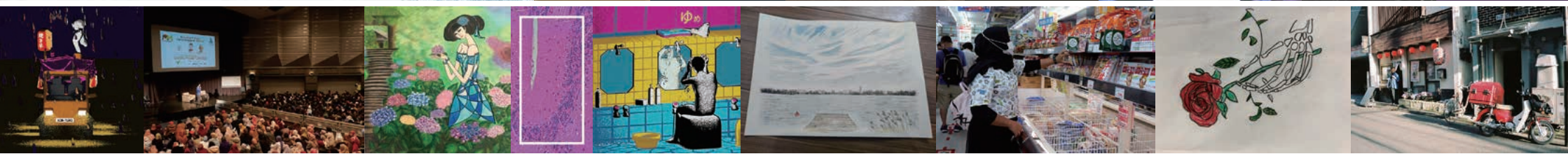
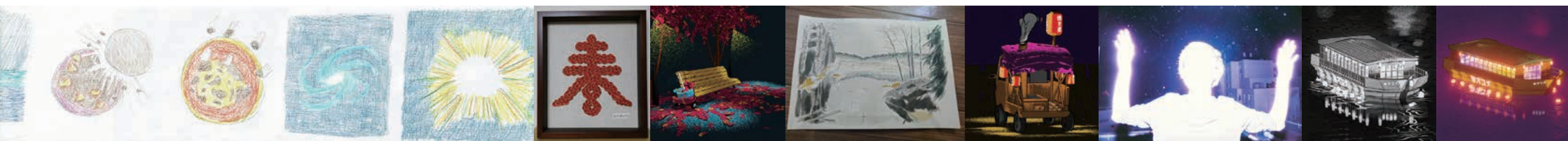
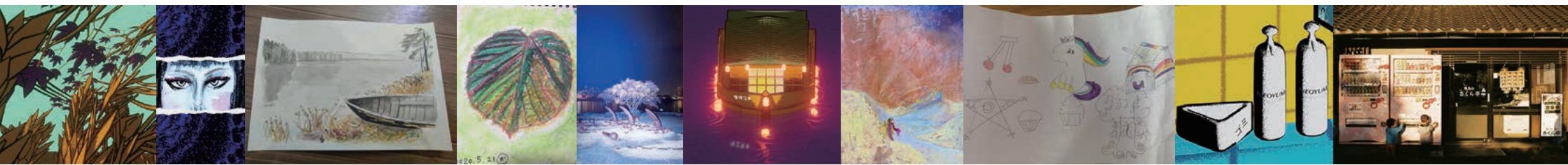
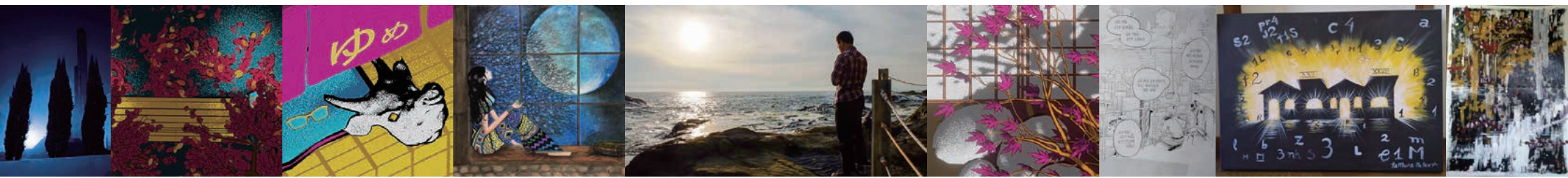
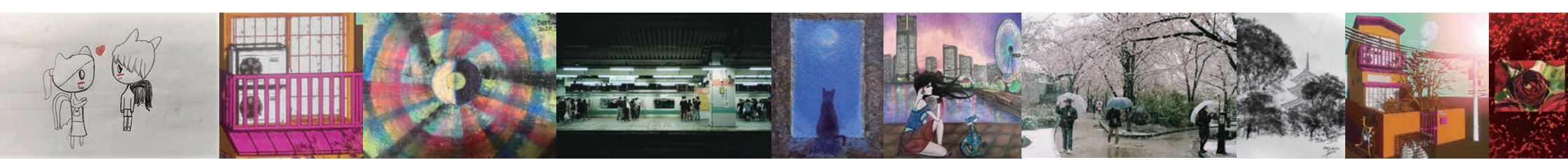
The Director of IMM Tokyo, Shigeaki Iwai, interviewed four participating artists to discuss their thoughts on their work, their lives in Japan, and their cultural background. These interviews shed light on the incidents, experiences, and future that Japan faces.

* Approximately 100 artworks were exhibited in the online museum "Art Museum • 'Seeing Us: Living in Japan with Roots Overseas'".

日本に暮らす海外ルーツを持つ表現者たちに焦点を当てる試みとして、IMM東京では国内の様々な年齢層、キャリア、国籍の人びとから作品を公募しました。

IMM東京を主宰する岩井は、応募者のうち4名にインタビューを実施し、作品への思いや、日本での暮らし、文化的な背景について話を伺いました。そこには、日本で直面した出来事、経験、そして将来への展望が浮かび上がります。

※ 特設ウェブサイト「オンライン美術館・わたしたちはみえている ― 日本に暮らす海外ルーツの人びと」には約100点の作品が集まりました。



リー正敏 / Masatoshi Lee

作品 《眼》 / Eye

まず最初に、簡単に自己紹介していただいてもいいですか？
First of all, could you briefly introduce yourself?

シンガポール人の父と、日本人の母の間に生まれました。生まれも育ちもずっと日本です。
I was born to a Singaporean father and a Japanese mother, but I was born and raised in Japan the whole time.

作品について、簡単に説明をお願いします。
Could you explain a little bit about the work?

たまたまインターネットで、すごく反射率の低い、ほとんど光を反射しない深い黒色の絵の具を見かけて、とても興味を惹かれました。とりあえず何も考えずに購入して、届いてからその絵の具を使った絵を描いてみようと思いました。
黒い何かの絵を描こうと考えた時に、まず頭に浮かんだのが「目」だったので、それを描くことにしました。深い黒色を際立たせるために金色の絵の具や鉛筆を使っていますが、そうすることで、見る人の角度によって絵の表情が変わるようになっていきます。
現代では、いわゆる名画はインターネットでいくらでも画像が検索できますよね。そこで、鑑賞者が絵の前に行かないと、本当の意味では作品を見られないものをつくりたいと高校生の頃から思っていました。
I found some deep black paints on the Internet that had very low reflectivity and didn't reflect light at all, and I thought they were really interesting. So I bought them, and then I thought I'd try to paint a picture using deep black when I got it.
When I wanted to paint a picture of a black object, the word "eye" came to mind, then I felt like I drew a picture of an eye. I used gold and pencils to highlight the deep black, and it makes the painting look different depending on the angle from which it is viewed.
Now, images of so-called masterpieces can be found on the Internet. Ever since I was in high school, I've wanted to create works of art in which the viewer has to be in front of the painting to truly see it.

海外のお父さんから培った日本人と違う考え方や習慣、判断する時の基準など、自分で気づいたことはありますか？
Have you noticed any differences in the way of thinking or habits that you learned from your father abroad, or the standards you use to make decisions?

高校生の時に「リー、おまえちょっと距離が近いよ」と言われて、そういえば距離が近いと言われることが結構あるな、と思い返したことがあります。
その理由は、やはりシンガポール人の親戚との挨拶が「ハグ」なんですわ。そういった積み重ねで、平均的な、一般的な日本人よりもパーソナルスペースが狭いのかな、と思ったことはありますね。
When I was in high school, someone said to me, "Lee, you're a little too close to me," and I thought to myself, "Come to think of it, I've been told I'm too close a lot of times."
The reason for this is that when I meet my Singaporean relatives, they greet me with a hug. As a result of those experiences, I have wondered if my personal space is smaller than the average Japanese person's.



インホウ(吳胤鋒) / INHO (YinFeng Wu)

作品 《Untitled》 / Untitled

まず最初に、簡単に自己紹介していただいてもいいですか？
First of all, could you briefly introduce yourself?

1991年に中国大連市で生まれました。2014年に、中国の貴州師範大学という国立大学でデザインの分野を卒業してからは、半年ぐらい公務員として勤めていましたが、どうしても芸術をやりたいと仕事を辞めて日本に来ました。
I was born in 1991 in the city of Dalian, China. I graduated from Guizhou Normal University in China with a degree in design in 2014, then worked as a civil servant for half a year. And I left my job and came to Japan to be an artist.

あなたのパフォーマンス作品について伺います。
なぜ首都圏で、ホームレスのような生活をしようと考えたのでしょうか？
*Let me ask you about your performance work.
Why did you try to live like a homeless person in a metropolitan area?*

僕は、常に消費社会を疑っています。要するに、東京にすることが、あまり幸福ではないと思っています。アパートに住んでいて、ラッシュの中で学校に行つて。様々な人間関係や、お金の消費といった問題もあるでしょう。
なぜ幸福ではないのか。自分でも全く分からなかったのも、実践的な作品を通じて答えを探そうと思ったのです。でも、答えは見つからなかったですね。
First of all, I'm always suspicious of consumer society. In short, I wasn't very happy in Tokyo. In Tokyo I live in an apartment, busy going to school. All sorts of relationships and stuff. There's also the issue of money consumption.
Why not happiness? I didn't understand it at all, and I wanted to find the answer with performance. But I didn't find the answer at all.

日本の社会で生きている自分のことを、どのように捉えていますか？
How do you see yourself living in Japanese society?

日本語を話せない時には本当に差別されました。今、日本語を多少は話せるようになって差別はありますね。何か理由があるのだろうか、とは思っています。
私は中国人の感性を持っていると同時に、日本人の感受性も持っています。以前、それぞれの感性を、どちらがどちらと比べるばかりではなく、両方の感受性を持つことが大事だと言われたことがありました。そう考えるようになってからは、一切迷わずに制作しています。
When I couldn't speak Japanese at all, I was really super discriminated against. Now, even if I can speak some Japanese, I may still be discriminated. I knew there would be a reason to discriminate.
I have the sensitivity of both the Chinese and the Japanese. I was once told that it's not a matter of which is which, but rather that it's important to have a sensibility for either. Once I understood that, I haven't hesitated to keep working on art.



イア・トゥリン / Ea Tulin

作品 《全ては頭の中》 / *It's all in the head*

まず最初に、簡単に自己紹介していただいてもいいですか？
First of all, could you briefly introduce yourself?

フィリピンから日本にきました。東京農工大学で修士号を取得した後、生化学で博士課程をスタートしました。今は脳の内部にあるタンパク質などについて研究していますが、同様に、アートのことも本当に好きなのです。そうして、趣味にしていたアートと、専攻の生物学、生化学を組み合わせることに決めました。

I'm from the Philippines. I recieved a masters in agriculture at Tokyo University of Agriculture and Technology, and straight after that I started a Ph.D in Applied biological chemistry. I am currently studying proteins in the brain and at the same time I really like art. That's why I've decided to combine my hobby, art, with my major, which is biology and biochemistry.

作品について、簡単に説明をお願いします。
Could you explain a little bit about the work?

研究で、脳に様々な化学物質を染み込ませた時に浮かび上がる模様や色、形がとてもユニークだと思い、そうしたイメージをもとにした作品で、自分の部屋を飾りたくりました。描かれている女性は夢を見ているようですが、同時に、彼女の背景にあるのは実際の脳の描写です。

作品制作を終えた時に多くの人に言われるのですが、描かれた女性たちは、私の自画像であるのかもしれませんが。混乱している、実験している、考え事をしている、幸せである、実験に疑心暗鬼になっている、そうした私の感情の象徴だということです。

So the first time I studied the brain and I stained different chemicals to the brain, I just thought that the patterns and the colors and the shapes are very unique, and that I wanted to make art for my room. I was drawing this girl and she looks like she is dreaming, which is what I mean by

"It's all in the head", but at the same time the background is actually the brain.

But once the pieces were finished, a lot of people told me that maybe these women are actually self portraits of me. Whenever I'm feeling confused, when I'm doing experiments or when I'm thinking, when I'm happy, when I feel like I am just skeptical about my experiments, then I draw them.

ご存知のように、フィリピンから日本への移住人口は増加しています。
イアさんのようにアートという表現を通じることで、移住者が直面する困難に変化をもたらすことができると思いますか？

As you know, the number of people from the Philippines migrating to Japan is on the rise. Do you think that having art as an expression, like you do, can bring about a change in the difficulties these migrants face?

自国の文化を持つ人と出会うこと、それがすでに大きな一歩ではないでしょうか。自分の国の言葉を話したり、似たようなポップカルチャーを知っていたり、同じ食べ物を一緒に食べたり。絵画やイラストだけではなく、音楽もそうですが、アートは人びとをつなげるとも強い方法だと思います。

I think it's already a big step for a person to see somebody from their own culture, who speaks their own language, who at least knows similar pop culture references or can share the same food with. I think art is a really strong way to connect with people, and it's not only art in the form of paintings or illustrations, but art also in music.

セドリック・ローランド / Cédric Rolando

作品 《#東京の決まり文句 - 16:53 焼き芋》 / *#TokyoClichés - 16:53 Yaki Imo*

まず最初に、簡単に自己紹介していただいてもいいですか？
First of all, could you briefly introduce yourself?

フランス出身で、大学ではアートを学び、修士課程ではマルチメディアとインターネットエンジニアリングを学びました。10代の時にはタブレットでデジタルの絵を描きはじめていました。今は東京に住んでいて、この街のことが大好きです。そして、東京という街に関連した作品をたくさん制作しました。

I'm French, I have studied Fine Art at university, and I have graduated with a Master of Multimedia and Internet engineering. As a teenager, I started to draw digitally on my computer with a graphic tablet. Now I'm living in Tokyo, a city that I love, and I'm creating a lot of artworks about it.

アーティストとして、東京のこういった部分が魅力的に感じられますか？

As an artist, what do you find most attractive about Tokyo?

公募展に出展したのは、東京の大好きな場所での思い出を作品にしたものです。例えば、上野公園に停まっていた焼き芋の

車の風景は、魔法のような瞬間です。冬の夜、温かい焼き芋を持って歩けば、その寒さと温かさによって、その瞬間、その場所が素晴らしい記憶になるのです。

Actually, the artworks I sent are kind of memories of the places I loved in Tokyo. For example, the artwork that I sent about a Yaki-imo car in Ueno Park, this is a magic moment for me! On a cold winter night, you are walking with your warm Yaki-imo inside your hands. Thanks to the contrast of this hot and cold feeling, that moment and this place could become a beautiful memory.

作品では、東京文化のステレオタイプを表現していると思いますが、それをご自身はどのように見えていますか？

あるいはステレオタイプか、そうではないかを意識しているのですか？

In your works, you dare to express stereotypes of Tokyo culture, but how do you see them, or are you aware of whether they are stereotypes or not?

日本について家族や友人と話したり、SNSでもそうですが、いつも同じことを聞いたり、質問したり、同じ返答をしていたりすると感じます。それが私にとってのステレオタイプであり、ラベリングや偏見ということです。私たちは見聞きしたり、絵を描いたり、体験を通じて、そうしたステレオタイプを壊したり、再構築して新しくしています。

例えば、初めて銭湯に行った時のことです。行く前までは、私は東京の人びとはとても潔癖なものだと心の中に描いていました。それは、私の周りにあるゲームや映画、メディアの影響でしょう。あなたには、私が地元の銭湯で小さな暖簾をめくったときの驚きが想像できるでしょうか？そこには別世界があり、みんなが裸で一緒のお風呂に入るといった社会規範があったのです。この経験から、私の地元への見え方が変わり、身体にリンクするようになりました。

When I'm talking about Japan with my family, my friends, or even on social media, I feel I'm hearing the same things, the same questions, and I keep on repeating the same answers. This is how I identify stereotypes, for me they are labels, prejudices. We are building, un-building and rebuilding new versions of them, by talking, seeing, picturing or experiencing them.

For example, I think about my first experience in a Sento. Before this visit I had a picture in mind that people in Tokyo may be quite prude. I thought this because of what I saw on media, movies, video games and what I talked about with my surroundings. Can you imagine my surprise right after passing the tiny curtain of my local Sento? It was another world, with other social norms where everybody is naked and taking baths together. This experience has changed my vision of locals, and my link to my own body.



多文化社会に 向き合う 団体紹介

There are various groups active in Japan that are exploring the nature of multicultural society. Some of them are actively engaging in arts and culture, and are presently trying to project their respective aspirations into contemporary society while putting these ideas into practice. Here, we introduce the activities of these groups.

[Remarks]

Profile: An introduction of activities by the organization

Key Point: Activities that IMM Tokyo wishes to highlight

* The content in this section was collected from each organization through a questionnaire. Some English texts are unedited to reflect the original submissions.

国内各地で、多文化社会のありようを探る様々な団体が活動しています。なかには文化芸術を積極的に取り入れる事例もあり、日々実践を重ねながら、それぞれの願う風景を現代社会に映し出そうとしています。ここでは、そうした団体の活動内容について紹介します。

[凡例]

概要：団体による事業紹介

ここがポイント：IMM 東京が着目する特徴的な活動

※ 掲載内容は各団体へのアンケートをもとに作成したものです。

INTRODUCING ORGANIZATIONS ENGAGED IN MULTICULTURAL SOCIETY

特定非営利活動法人 アデアベバ・エチオピア協会 Adeyabeba Ethiopia Association

概要：

東京に住むエチオピア人の半数が葛飾区に住んでおり、地域の住民として助け合い楽しむことを目的に、文化交流会などを続けています。年3回の交流会ではエチオピア料理やダンスで盛り上がり、地域のイベントにも多数参加しています。在日エチオピア人によるアート作品や彼らが取材された作品とエチオピア文化の展示、コーヒーセレモニー、自由に楽しむ「アートクラブ」など多様な活動を行っています。

ここがポイント：

近年、協会のイベントを通じて日本人ボランティアが増え、葛飾区のお祭りではオリジナルの「エチオピア盆踊り」を披露するなど、ユニークな手法でエチオピアの魅力を伝えています。文化活動以外にも、難民の方を含む在日エチオピア人への支援や、本国エチオピアへの支援を行っています。幅広い活動を通して、地域に根差し「関わっていく」取り組みが特徴的です。

Organization Profile：

Half of the population of the Ethiopians in Tokyo live in Katsushika Ward, where we have held cultural exchange events with the goal of helping and socializing with each other as local residents. In our triannual exchange event, we enjoy Ethiopian food and dance; we also participate in many community events. We host a variety of activities, including exhibitions of artworks that involve resident Ethiopians as artists or subjects of artworks, coffee ceremonies, and an "art club" that is free to enjoy.

Key Point：

In recent years, the number of Japanese volunteers has been increasing through our events, and we have brought about a unique way of promoting the charm of Ethiopia, for example through Ethiopian Obon Dancing at a festival in Katsushika Ward. Beyond cultural activities, we also support refugees and other Ethiopians in Japan, as well as Ethiopians in their home country. Through a wide range of activities, our localized approach to engagement characterizes our organization.

WEB <https://adeyabebaethiopia.webs.com/>

武蔵野美術大学・カシオ計算機株式会社 CASIO COMPUTER Co., Ltd and Musashino Art University

概要：

本プロジェクトは、カシオ計算機と武蔵野美術大学の産学連携事業として取り組まれています。武蔵野美術大学の授業「上級日本語科目」を履修した学生とカシオ社員がチームを組んで、多文化社会を支える取り組みに携わる個人や団体を取材し、ドキュメンタリー映像を制作します。制作したドキュメンタリーとプロジェクト全体の記録は、プロジェクトのウェブサイトで公開しています。プロジェクトを通じて、アート・デザインを学ぶ学生たちが、多文化社会の持つ魅力と課題を学びながら、多文化共生を自分ごととしていくことを目指します。同時に、学生たちの制作した作品と学生たちの学びの軌跡を公開することで、共に多文化共生について考えていく社会を築くことを目的としています。

ここがポイント：

このプロジェクトは、日本語の授業でありながら「多文化共生社会とは具体的にどんな社会か？」と学生に問いかけることから始まります。その見所は、まさに日本の学生と留学生、そしてカシオの職員の方々がフィールドワークやインタビュー、映像制作を通じて「多文化共生社会」に向き合っていくところです。

Organization Profile：

This project is an industry-university collaboration between Casio Computer Co., Ltd and Musashino Art University. Students of Musashino Art University's Advanced Japanese Language Course team up with Casio employees to interview individuals and organizations involved in multicultural society promotion in order to produce a documentary film. The documentary film and a record of the entire project can be found on the project website. Through this project, we aim for students of art and design to learn about the merits and challenges of a multicultural society and to make multiculturalism a personal matter. At the same time, we aim to build a society in which we can think about multiculturalism together by publicizing the works created by the students and the trajectory of their studies.

Key Point：

This project, which is also a Japanese class, begins with a question to the students: What exactly is a multicultural society? The highlight of this project is that the Japanese students, international students, and Casio employees are confronting the idea of a "multicultural society" through fieldwork, interviews, and video production.

WEB <https://web.casio.jp/mau/index.html>

一般社団法人 kuriya

kuriya General Incorporated Association / kuriya

概要：

一般社団法人kuriyaは外国ルーツの若者たち＝未来の可能性と捉え、たくさんの可能性を持つ外国ルーツの高校生や若者が、希望を持って未来を描ける社会をつくることを目指して、高校でのキャリア教育のプログラムや学校外での居場所づくりを実施しています。外国ルーツの高校生や若者の多様性を育て、日本社会をつなぐことで、共生社会を実現することを理念としています。外国ルーツの高校生の中退率は日本人の7倍と高く、また大学への進学率も約4割（日本人は約7割）であり、彼らが未来を希望を持って描けない、厳しい現状があります。そのような課題に対して、私たちは事業を通じて、① 高校からの中退を予防し、卒業後の進路につなげる事。② 外国ルーツである事に自信をつけ、エンパワメントする事。③ 外国ルーツの高校生や若者が、その多様性を育めるための仕組みづくりを目的としています。

ここがポイント：

kuriyaでは国内の活動だけに留まらず、東京、香港、ペナンのアジア地域を結ぶ「Moving Story」を実践していました。このプロジェクトは、支援の対象としてではなく、人材育成の一環としてアートを通じたエンパワメントプログラムを行っている個人やNPOが連携し展開します。次世代のリーダー育成を目的に、写真や映像制作等を題材としながら、アジア圏の国々とその取り組みや課題について情報共有し、課題解決に向けたネットワークの構築と多文化的な人材形成の基盤づくりを担うものです。

WEB <http://kuriya.co/>

Organization Profile：

With a mission to provide opportunities for the migrant youth to enhance their potential to its fullest, we work with youth of age between 16 to 26. Based in Tokyo, we conduct various projects inviting migrant youths to work along with Japanese youths. We believe that the youth are potential to our society and that diversity supplements a better community of tomorrow. We provide internship training for aspiring youths with strong willpower, commitment and determination. It is a more intensive training through Project Based Learning. The youth will work on their own project and receive a scholarship and other support to implement their project. With this, we aim to equip the migrant youth with life skills to provide the first step for better educational/employment opportunities.

Key Point：

kuriya have been implementing an international exchange project called "Moving Story" which connects three cities in Asia: Tokyo, Hong Kong and Penang. In the era of globalisation, we encounter more diversity than ever before. When diversity may be the cause of conflict and tension, it is vital to create a new approach based on interculturalism to recognise the value of diversity to increase interaction, mixing and hybridisation between cultural communities. The ability to work with diversity is an essential ability for leadership as a global citizen. This project perceives intercultural youth, with so much cultural diversity within, as a potential to the society. The project aims to empower the intercultural youth through a creative approach by providing opportunities to 1) visualise the perspective of intercultural youth through art and media to advocate of their voice to the society; 2) To connect intercultural youth across Asia to create a dialogue on common global issues and potentials of our society; 3) To build global network among each other and to think together of possible actions to be taken in order to create a better future for our life.

公益財団法人 国際文化フォーラム

The Japan Forum

概要：

公益財団法人国際文化フォーラム（TJF）は、多様なことばと文化を背景に持つ若い世代が協力して「一人ひとりの個性を尊重し、多様性に富み、創造力を育む社会」を創れるようになることを目指しています。その事業の一つである本活動は、様々な文化的ルーツを持つ高校生と多様なことばや文化に興味を持つ日本人高校生が参加する合宿です。合宿の交流活動（身体表現、造形表現、音やリズムをテーマにしたワークショップ）を通じて、ことばと身体で自分を表現する力や創造性を刺激し合い、異なる他者を理解する力、協働し、バックグラウンドの違いを超えてコミュニケーションを図る力、多様性を尊重する力を育むことを目指します。

ここがポイント：

アーティストが表現力を伸ばすための独自のプログラムをつくるとともに、ファシリテーターとして参加者それぞれの自己開示を促しています。また、合宿参加者のOBやOGが学生サポーターとして関わり、高校生のコミュニケーションをサポートするなど、主催側のスタッフ以外にもさまざまな担い手が携わっています。そうした参加者一人ひとりへの手厚いサポートも特徴といえるでしょう。

WEB <https://www.tjf.or.jp/performance/>

Organization Profile：

The Japan Forum (TJF) aims to create "a society that respects individuality, enriches diversity, and fosters creativity" by bringing together young people with diverse language and cultural backgrounds. One of our projects is a camp for high school students with diverse cultural backgrounds and Japanese high school students with an interest in diverse languages and cultures to participate in. Through the exchange activities of the camp (physical expression, molding, sound and rhythm workshops), we aim to stimulate each other's creativity and the ability for verbal and physical self-expression, to understand others, to work together, to communicate beyond differences in background, and to respect diversity.

Key Point：

The artists create their own programs that develop their expressive abilities and play a role as a facilitator, encouraging participants to open up. In addition to the organizing staff, many other people are involved in the activities, as camp alumni act as student supporters to help high school students communicate with each other. A distinctive feature of the program is the warm support it provides each participant.

マルパ実行委員会 MULPA

概要：

マルパでは、外国につながる人たち（若者・子どもたちなど）や障がいのある人たちの社会包摂を目的とした教育普及事業を神奈川県立近代美術館、茅ヶ崎市美術館、平塚市美術館、横須賀美術館、藤沢市アートスペースと行なっています。2019年3月に2回にわたって開催された撮影会「多文化ユース・フォトセッション in 三浦半島」では、横浜市、横須賀市、平塚市等に住む多文化な背景を持つ子ども・若者たち（延べ27名）が、葉山・横須賀など三浦半島の風景写真の撮影会に参加しました。このプロジェクトは、参加者一人ひとりのエンパワーメントや参加者同士の仲間づくりを目的に実施されました。

ここがポイント：

マルパを構成する各美術館の教育普及事業で得られた経験を、研修会やフォーラム等で発信・共有しながら、県内の美術館・博物館全体へとインクルーシブ化・多文化化を波及させることを目指しています。

Organization Profile：

MULPA conducts educational programs for the social inclusion of people with links abroad (including children and young people) and those with disabilities in cooperation with The Museum of Modern Art, Kamakura & Hayama; Chigasaki City Museum of Art; Hiratsuka City Museum of Art; Yokosuka Art Museum; and Fujisawa City Art Space. In the "Multicultural Youth Photo Session in Miura Peninsula", children and young people (a total of 27 participants) with multicultural backgrounds living in Yokohama City, Yokosuka City, Hiratsuka City, and other cities participated in a photo session, taking pictures of the scenery of the Miura Peninsula, including Hayama and Yokosuka. This project was carried out with the aim of empowering each participant and fostering friendships between them.

Key Point：

We aim to share and disseminate the experiences gained from the educational programs of the museums that make up MULPA through workshops, forums, and other activities with the aim of spreading inclusivity and multiculturalism throughout the prefecture's museums and galleries.

事務局：(公財) かながわ国際交流財団

WEB <http://www.kifjp.org/mulpa/>

カナガワビエンナーレ国際児童画展 Kanagawa Biennial World Children's Art Exhibition

概要：

神奈川県が提唱した「民際外交」の事業の一つとして1979年の「国際児童年」の制定をきっかけに「カナガワビエンナーレ国際児童画展」が誕生しました。絵画を通じて未来を担う世界の子どもの夢と創造力をはぐくみ、異なる文化や生活を互いに理解し合い、国際交流を深めることを目的としています。海外や神奈川県在住・在学の4歳～15歳の児童・生徒を対象に作品を募集し、審査を経て、表彰式および展覧会を開催。日本において、外国にルーツを持つ子どもたちが年々増えているなか、多文化共生の観点から、全国の外国人学校に在学・通学している児童・生徒も対象にしています。

ここがポイント：

1981年の第1回展からの入選作品のほとんどを神奈川県立地球市民かながわプラザで收藏しています。本展での入選作品展示以外にも、入選作品の館外貸し出し（一部制限あり）を実施し、世界の児童画に触れる機会を広める活動を行っています。

Organization Profile：

Kanagawa Biennial World Children's Art Exhibition was established in 1979 as one of the "intercultural diplomacy" projects advocated by Kanagawa Prefecture, with the establishment of the International Year of Children. The exhibition aims to: use painting as a means for fostering dreams and creativity within the children of the world who will carry the future; to promote the mutual understanding of different cultures and lifestyles; and to deepen international exchange. We are soliciting works for children and students aged 4 to 15 years old who live or study in Kanagawa prefecture or overseas, and after screening, we hold an awards ceremony and an exhibition. As the number of children with foreign roots is increasing year by year in Japan, from the perspective of multicultural coexistence, we are also targeting children and students who are enrolled in or attending foreign schools nationwide.

Key Point：

Most of the winning works from the 1st exhibition in 1981 are stored at Kanagawa Plaza for Global Citizenship. In addition to the exhibition of the winning works in this exhibition, we also rent out the winning works outside the museum (with some restrictions) to spread the opportunity to come into contact with children's paintings from around the world.

事務局：神奈川県立地球市民かながわプラザ（指定管理者：青年海外協力協会）

Kanagawa Plaza for Global Citizenship (Designated manager: Japan Overseas Cooperative Association)

WEB <https://www.earthplaza.jp/biennial/>

NPO 法人 多文化共生リソースセンター東海

Resource Center for Multicultural Community Tokai

概要：

当団体では、日本に居住する外国人及び日本人に対して、多文化共生社会の実現に向けた活動の促進に関する事業を行い、在住外国人と日本人、また在住外国人同士、日本人同士の連携・協働・共生に係る問題の改善や解決を図ることで、多文化共生社会の実現に寄与することを目的に活動しています。その一環として展開している「あいち多文化映画祭」は、2012年に名古屋市内で開催された日本語教育国際研究大会で、学会員以外の方が楽しめる参加機会の一つとして企画・実施した「多文化映画祭」に大勢の参加が得られたことをきっかけに、日頃当団体の活動に関わりのない人々にも「多文化共生」に触れていただける機会として継続的に実施しています。

ここがポイント：

日本語学習支援など多文化共生社会の実現に向けたさまざまな活動を行なっています。しかし、研修会やセミナーといった企画に参加するメンバーが、いつも同じ顔ぶれだったことに危機感を覚え始めたのが「あいち多文化映画祭」です。誰でも気軽に楽しめる「映画」をツールにすることで、さまざまなルーツを持つ方々が参加できるように取り組んでいます。また、映画を観るだけでなく、鑑賞後に感想を言い合ったり、映画が伝えようとしているメッセージを考えたりすることで、お互いの文化の違いや共通点への理解を深める“交流型の映画祭”を実践していることも特徴です。

Organization Profile：

Our goal is to promote the realization of a multicultural society through activities for both non-Japanese residents and Japanese people, and by ameliorating and solving problems related to the cooperation, collaboration, and coexistence between and amongst non-Japanese residents and Japanese people. As a part of our activities, the Aichi Multicultural Film Festival was planned and implemented at the International Conference on Japanese Language Education, held in Nagoya in 2012, as an opportunity for non-academic staff to participate in the festival. Since then, we have continued to hold the festival as an opportunity for people not usually involved in our activities to experience “multiculturalism”.

Key Point：

Resource Center for Multicultural Community Tokai has been carrying out various activities for the realization of a multicultural society, such as supporting Japanese language learning. However, it seems that our organization started the Aichi Multicultural Film Festival because organizers felt a sense of crisis when they found out that even though they planned training sessions and seminars, the participants were always the same people. We are trying to make movies a tool that anyone can enjoy easily so that people from various backgrounds can participate in the festival. In addition, the Aichi Multicultural Film Festival is unique in its “exchange-style” format, where people not only watch the films but also deepen their understanding of each other's cultural differences and commonalities by sharing their impressions and thinking about the message the films are trying to convey after watching them.

WEB <http://mrc-t.blogspot.com/p/about-us.html>

みえ市民活動ボランティアセンター

Center for Citizen Initiatives Mie

概要：

国籍や民族などの異なる人びとが、お互いの文化的な違いを認め合い、対等な関係のもとで、地域社会と一緒に築いていく「多文化共生社会づくり」に三重県では取り組んでいます。その一環として展開している「多文化共生理解イベント Hand in Hand」では、日本人や在留外国人、留学生とともに毎回特定の地域や国を選んで、その場所の歴史や文化を学ぶ交流の場を設けています。取り組みの一つ「妄想世界旅行」では、訪れた国の歴史、文化等を知ってもらうことで、外国の暮らし、またその国の出身者である外国人住民に対しても理解を深めることを目的としています。

ここがポイント：

「多文化共生理解イベント Hand in Hand」の一環として実施されている「妄想世界旅行」は、演劇や音楽、映像制作のような芸術表現を主軸にした活動ではないものの、多文化理解を促進する一つの方法として、各国の文化を学ぶ講座そのものを「世界旅行」に見立てたユニークな取り組みです。

Organization Profile：

In Mie Prefecture, people of different nationalities and ethnicities recognize each other's cultural differences and work together to build local communities based on an equal relationship. As part of this effort, the “Hand in Hand 2019 Event for Multicultural Understanding: Delusional World Travel” provides an opportunity for participants to learn about the history and culture of a specific region or country with Japanese people, foreign residents, and international students each time they visit. By learning about the history and culture of the countries visited on this delusional trip, we aim to deepen an understanding of life abroad, as well as an understanding of the people who have moved to Japan from those countries.

Key Point：

Rather than focusing on expressive art forms like theater, music, or video production, “Delusional World Travel” — held as part of the “Event for Multicultural Understanding Hand in Hand” — is unique as a means for promoting multicultural understanding, treating its sessions as a kind of trip around the world in which you learn about the cultures of different countries.

多文化理解イベント実行委員会：三重県／公益財団法人三重県国際交流財団（MIEF）／JICA 三重県デスク
Mie Prefecture / Mie Foundation for International Exchange (MIEF) / JICA Mie Prefecture Desk

WEB <https://www.mienpo.net//>

東京外国語大学 多言語多文化共生センター Tokyo University of Foreign Studies

概要：

2014年以降、ポルトガル語劇のブラジル人コミュニティ出張公演を実施しています。本学の大学祭「外語祭」では、2年次の学生が各自専攻する言語で演劇を上演する伝統があります。そのために春から練習を積んでいます。たった1回だけの上演ではもったいないと思い、せっかくならば国内に在住するブラジル人の方々に観てもらいたいと思ったところから始まりました。今後の目標は、地元のブラジルと日本の子どもたちの交流の場にする事です。観客もブラジル人が大半で、交流は、演劇公演と上演後に観客と少し触れあうだけにとどまっていますが、将来的には地元の学校から日本人の子どもたちにも来てもらうほか、本学からも日本人の学生以外にブラジルからの留学生も交え、深い交流ができる場をつくりたいと考えています。

ここがポイント：

大学祭での演目に留まらず、ブラジルにルーツを持つ方が多く居住する群馬県大泉町への出張公演も行なっています。各国の言語を学ぶのみならず、文化的な交流を通じ、海外にルーツを持つ方を含む地域住民と在学、留学生との関係構築を目指していることが特徴です。

Organization Profile：

Since 2014, we have been performing Portuguese dramas to the Brazilian community at various sites. At the "Gaigosai" within our university festival, second-year students have a tradition of performing a play in the language of their respective majors. We have been practicing since spring, and we thought it would be too good to only have one performance, so we wanted Brazilians living in Japan to see the play, too. Our next goal is to make a place of exchange between local Brazilian and Japanese children. At the moment, most of our audience is Brazilian, and we only have brief exchanges with audience members after our performances. However, in the future, in addition to inviting Japanese children from local schools, we would like to have Brazilian international students from our school alongside our Japanese students and create a place to have deep exchanges.

Key Point：

Not only do we perform at the university festival, we also travel to Oizumi in Gunma Prefecture, where many people with Brazilian roots live. Our goal is not only to learn the language of each country, but also to build relationships between our domestic or international students and local residents, including those with roots abroad, through cultural exchange.

WEB <http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer/>

公益財団法人 可児市文化芸術振興財団 KANJI public arts center

概要：

様々な国籍や年齢の参加者が一つの舞台を作り上げる「多文化共生プロジェクト」を2008年からスタート。2018年からは鹿目由紀氏の脚本・演出のもと、ドキュメンタリー演劇の手法を取り入れた演劇作品を制作しています。海外にルーツのある方々を対象に参加者それぞれが持つエピソードを拾い上げていく過程で見えてくる、文化の違いや共通点を参加者同士で共有しています。また、一つの演劇作品を作りあげ発表することで、鑑賞者にも多文化共生のきっかけとなる機会を提供しています。本企画がきっかけで形成された参加者（鑑賞者含む）同士のコミュニティの継続ができるよう、年間を通して交流会やワークショップなども定期的に実施しています。

ここがポイント：

ドキュメンタリー演劇とは、出演者へのインタビューをもとに脚本を起こす演劇手法です。海外にルーツを持つ方々へのインタビューから脚本が生み出され、その言葉を本人が語るため、ドラマとしての演技の面白さと、登場人物自身のリアルな姿を知る契機になることも特徴です。彼／彼女たちにとっても、演劇中の登場人物として台詞を語ることで、自分自身の考え方に向き合う機会になっているのかもしれない。

Organization Profile：

In 2008, we started a "Multicultural Coexistence Project" in which participants of diverse nationalities and ages create a unified stage. Since 2018, under the script and direction of Yuki Kanome, we have been producing theater works that incorporate documentary theater techniques. Taking those with roots abroad as a subject, participants share the cultural differences and similarities that emerge in the process of tapping into each of their life experiences. We also provide an opportunity for the audience to experience multiculturalism through the creation and presentation of a theater piece. Throughout the year, exchange meetings and workshops are held periodically to maintain the sense of community among participants (and audience members) formed by this projects.

Key Point：

Documentary theater is a theatrical technique in which the script is created from interviews with its actors. Since the script is created from interviews with people with roots abroad, and the actors themselves speak in their own words, it is interesting both in terms of acting as a drama and also as an opportunity to learn about the realities of the people themselves. By telling the characters in the play what they have to say, it may be an opportunity to confront one's own way of thinking.

WEB <https://www.kpac.or.jp/>

東九条マダン実行委員会

Higashikujo Madang Executive Committee

概要：

多くの在日韓国・朝鮮人と日本人が共に暮らすまち、京都市南区東九条で地域のまつりとなることを目指して、1993年より始まった活動です。まつりの創造と開催、ブンムル（朝鮮半島に伝わる打楽器などを用いた演奏や演舞）などの屋外パフォーマンス、野外劇、まつりを飾る美術造形物の制作と展示のほか、参加型のあそびや文化体験を企画しています。マダン 마당 とは、韓国語で「ひろば」という意味で、様々な立場、ルーツ、心身の状態、そしていろんな思いを持つ人々が、違いを受け入れながら、ありのままの自分を表現し、新しい自分を見つけていく場、そうした“みんなのまつり”を毎年つくり続けています。

ここがポイント：

東九条地域は戦前戦後を通して、朝鮮半島から渡ってきた人たちだけでなく、生活の場を求めて日本の各地から流入した人たちも抱き込む形で、都市周縁のダイナミズムを形成してきた地域といえます。多様な背景を持つ人々と地域住民との共生への模索の歴史があった、誰もが主体となるまつりづくりを東九条地域で実現させました。特定の民族を越えた視点を、「まつり」を通して、90年代という早い時期から実践してきた団体です。

Organization Profile：

Our activities started in 1993 in Higashikujo (Minami-ku, Kyoto), where many *Zainichi* “Resident” Koreans, Koreans and Japanese people live together. We create and organize festivals and outdoor performances — such as *pungmul* (a traditional Korean percussion performance and dance) — produce and exhibit art and sculptures to decorate the festival, and produce participatory fun and cultural experiences. *Madang* means “space” in Korean; it is a place where people with various positions, roots, mental and physical conditions, and feelings can express themselves as they are and encounter other identities while embracing differences, making this a festival for everyone.

Key Point：

The Higashikujo region has a dynamic history inherent to the periphery of a large city, where people came not only from the Korean Peninsula before and after World War II, but also came from all over Japan in search of a place to live and form a region. People from diverse backgrounds have been working with local residents to support and campaign for the improvement of their lives and have sought to create a festival in which everyone in the city takes the initiative. Since the early '90s, our organization has been exercising a viewpoint through “festivals” that goes beyond any specific ethnic group.

WEB <https://www.h-madang.com/>

写真提供：東九条マダン実行委員会

特定非営利活動法人 ダンスボックス

NPO DANCE BOX

概要：

早くから渡来文化が入り、開けた土地であった長田のまち。特に1868年兵庫港の開港以降、多様な住民を引き受ける歴史をもっています。西日本では第2の大きさをもちコリアン・コミュニティ、奄美からの移住者コミュニティ、最近ではベトナムからの移住者が集住する“多住地域”である。誰もが文化芸術活動に等しく触れることができる機会を創出し表現の自由が担保された場を継続することを目的に、この地域の特性を活かしたプログラムを行っています。

ここがポイント：

NPOスタッフやアーティストが地域のコミュニティに入り込み、まちの人々と丁寧なコミュニケーションを紡ぐことからプロジェクトを立ち上げています。多様な文化を持つまちの人々との「出会い」をもとに表現を見つけていくため、個々のコミュニティが持つ文化をゆるやかに混ぜ合わせた、形式にとられないアウトプットが特徴的です。代表の横堀さんは「さまざまなルーツを持つ人だけではなく、長田に住む色々な『日本人』も活動に巻き込んでいきたい」と語っています。そこに、ダンスボックスの目指す多様性が垣間見える気がします。

Organization Profile：

The town of Nagata was an open land and early adopter of immigrant culture. Since the opening of the port of Hyogo in 1868 in particular, it has had a history of taking in a diverse population. It is a “multi-resident community” with the second largest Korean community in western Japan a community of immigrants from Amami Islands, and more recently, Vietnamese immigrants. The program takes advantage of the unique characteristics of the area with the goal of continuing to create opportunities for everyone to have equal access to cultural and artistic activities, as well as provide a guaranteed place for freedom of expression.

Key Point：

NPO staff and artists enter the local community and weave careful communication with its people towards launching the project. In order to find modes of expression based on “encounters” with people of diverse cultures in the town, the project characterizes itself with unstructured outputs that gently mingle the cultures of each community. Director Yokobori says, “In our activities, we want to involve not only people of different nationalities but also various ‘Japanese’ living in Nagata.” This is a glimpse of the diversity that DANCE BOX is aiming for.

企画制作・運営：NPO 法人 DANCE BOX

WEB <https://dancebox.studio.site/>

「多国籍カラオケ大会」写真：岩本順平

“Multinational Karaoke Concert” Photo by Junpei Iwamoto

PERSPECTIVES OF CONTEMPORARY ARTISTS

現代アーティストたちの眼差し

日本の「移住と移民・多文化社会」を現代アーティストたちはどのように見つめ、作品を制作しているのでしょうか。IMM東京を主宰する岩井がインタビューを通じて、李晶玉、岩根愛、高山明の3氏それぞれのアプローチを紐解きます。

What are artists' perspectives on migration, immigration and multicultural society in contemporary Japan, and how do they create their works of art? Shigeaki Iwai, the Director of Immigration Museum Tokyo, interviewed three guest artists — JongOk Ri, Ai Iwane, and Akira Takayama — in order to get to the root of how they approach this question through the medium of contemporary art.

※ 特設ウェブサイト「オンライン美術館・わたしたちはみえている — 日本に暮らす海外ルーツの人びと」ではインタビュー映像とテキスト全文が公開されていました。本書には、その一部を抜粋・編集し掲載しています。

* The video and full text of the interview were published in "Art Museum · 'Seeing Us: Living in Japan with Roots Overseas'". Excerpts of those interviews have been edited for this publication.

私が在日であるということは、
作品をつくる上で中心に置くようなことでは
あまりないんですよ。

李：美大の授業を聴講しに行ったり美大生と話すと、いつの時点で絵を描くのをやめたのか、武勇伝みたいに語る人もいて。それを聞くと、人生で一番一生懸命に絵を描くのが予備校時代になってしまうのでは、と感じます。実際、卒業制作展などを見に行くと、どの絵もすごく似ているんですよ。多くの人が、予備校時代に同じような絵の癖が形成されて、そして美大ではコンセプトだけ追求するのはどうなんだろうって、外から見ていると感ずることがあります。

岩井：耳が痛いですね。でも本当にそうだと思います。やはり、いくつかの受験スタイルを無批判に受け入れてしまう。

李：そうですね。それもあってか、私の作品に対しては線への指摘をもらうことが多いです。サブカルっぽい線だと。そこに影響を受けているから、ということもあるんですけど。

岩井：では、李さんの社会における作家としてのスタンスについて、話を伺いたいと思います。雑誌『美術手帖』に掲載されていたインタビューの中で、日本人の作家や学生は、自分の所属みたいなものも取り払って、自由な存在として対話したいと言うけれども、李さんは「そんなことはあり得ないと思った」とおっしゃっていますね。そうした日本の美大に通っている若いアーティストたちと対話を持つ時に、一番の違いは何だと思いますか？

李：日本の方、特に美大生と話していると、自分は自由な存在だと思いたいんだろうなと感ずることが多かったです。もちろん人にもよりますが、例えば自分を日本人として、あるいは日本社会の一部として語らないでほしいと話す人がいたり、自分はあらゆる属性から自由でありたいし、自由を保っていると思っている人が多い印象で、そこは境遇の違いが見えてくる部分だと思っています。在日ってどうしても自分と国家の関係性や共同体との関係性について考えざるを得ないんです。例えば、学生の頃から学生同士での討論会も多くあったし、避けて通れない問題としてそれらが当然のように存在し、話してきたことでした。そういう意味では、どうしてもマイノリティとマジョリティの違いが出てくるのは仕方ないし、考え方の差異というのは確かに存在すると感ずた部分でもあります。

岩井：おそらく国内において、自分がマイノリティになった経験のある個人だったら、何が例えられる事象があると思うんです。イメージーションを働かせて「自分とは違うけれどもこんな風なんじゃない？」とか。でも、そういう経験が日本人の若い人にとっては少なくなってきたのかもしれないですね。

李：特に美大とかだと、そういう傾向が強いかもしれない。

岩井：本当はそれではいけない、と僕は思いますけどね。

李：より触れたくないというか、不純なもののように嫌がる傾向が強い印象がありますね。

岩井：もう一つ質問なんですが、ある社会の中で自身が多数派ではないかもしれないと自覚した時に、作り手として表現活動にどのように作用すると思いますか？例えば、仮にマイノリティに対する負の心象があるとすれば、表現活動によってそれを別のベクトルに変えることができるのか、とか。マイノリティという言い方はふさわしくないかもしれませんが、李さんは在日コリアンであることから、そのような立場にある方々にとって、表現活動がどのように作用していると思いますか？表現している人と、していない人との違いでもいいですけども。

李：私の場合は在日三世で、二世や一世の方とお話した時に、自分たちの世代と比べてあまり不遇感がないように見えると言われて、その通りだと思いました。私が小学5年生の時に日朝平壤宣言が発表されたのですが、当時はメディアの北朝鮮へのバッシングが強くなった時期でもあって、日本社会での立場が難しいことを実感しました。それでもやっぱり小・中・高・大学まで全部朝鮮学校で進学してきたので、マイノリティであるということによって自分に何か不足があるとか、コンプレックスみたいなものは自分にはあまりないように感じています。周りがみんな在日という環境で育ってきたので。だから、日本の方と話した時にさっき言ったような差異を感ずることはもちろんあるんですけど、自分としては安定した自分を感ずています。その中で、在日であることは当たり前前の自分の属性の一つであって、例えば自分が女であることと同じように感ずています。ただ、どうしても日本社会の中で美術をやっているとそういう立場の方が少ないので、そこに注目されがちですけど。自分の意識としては、私が在日であるということは、作品をつくる上で中心に置くようなことではあまりないんですよ。



李 晶玉 / JongOk Ri (Photo by Akinali Nishimura)

The fact that I am *Zainichi* is not really something I place at the center of my art.

Ri : When I audit art school classes and talk with art school students, some tell epic tales of the moment they gave up on painting. Hearing that makes me feel like the time that these students paint the most earnestly in their lives ends up being in prep school. When I actually go to see graduation exhibitions, the works all seem very similar. From the outside, I sometimes feel that many people develop the same drawing habits during their prep school years, and then just pursue concepts in art university.

Iwai : That's hard to hear. But I think that's really true. After all, some examination styles are accepted uncritically.

Ri : Yes, maybe that's part of the reason why my lines often get pointed out. I'm told my lines are "subculture-like", which may be in part because I was influenced

by subculture.

Iwai : Now I'd like to ask you about your stance as an artist in society. I remember that in your interview for *Bijutsu Techo*, with regards to how Japanese artists and students want to wipe away their affiliations and interact as free beings, you commented that you thought that was impossible. What do you think is the biggest difference when you have a dialogue with these young artists who attend art universities?

Ri : When I speak with Japanese people, especially art students, I often feel that they want to think of themselves as free beings. Of course, it depends on the person, but for example, there are people who say that they don't want to be talked about as a Japanese person or as a part of Japanese society, wanting to be free from all affiliations. I have the impression that many of these people think they are preserving their freedom; I think this is the part where a difference in circumstances becomes visible. *Zainichi* people are inevitably forced to think about the relationship between themselves and the nation the community. For instance, I've debated these things as unavoidable and natural issues numerous times amongst my peers since I was a student. In that sense, the fact that there are differences between minorities and majorities cannot be helped, and this is one difference in thinking that I certainly feel exists.

Iwai : I think that individuals who have experienced being in the minority in Japan have at one point or another been compared to something. Those individuals ideate who they are or are not. But that kind of experience might be less and less common among young Japanese people.

Ri : That decrease might be especially true for art universities.

Iwai : I don't think that's good, though.

Ri : I have the impression that there is a strong tendency for young Japanese people to be reluctant to touch on this issue or be averse to the issue as if it were something impure.

Iwai : Another simple question: How do you think being aware of your minority position influences your expressive activities as a creative? For instance, could a negative image of minorities be patched up through creative expression? Or, if that negative image cannot be changed, could it be forgotten as expression creates an alternative avenue? Perhaps the term "minority" might not be the most fitting, but you are aware of yourself as *Zainichi* Korean. How do you think your expressive activities work within this premise? You could also talk about the difference between those who express themselves and those who do not.



作品《Olympia 2020》を
前にしての対談風景
A conversation in front
of *Olympia 2020*
(Photo by Akinari Nishimura)

Ri : In my case, I am third-generation *Zainichi*, and when I spoke with second- and first-generation *Zainichi*, they told me that our current generation didn't appear to be as disadvantaged as theirs was, which I thought was true. The Japan-North Korea Pyongyang Declaration happened when I was in fifth grade of elementary school. The media at that time was strongly bashing North Korea, making me realize that we *Zainichi* are in a difficult position in Japanese society. Even so, I went to elementary school, junior high school, high school, and university all at *Chōsen gakkō* Korean schools in Japan, so I don't feel like I have any shortcomings or complexes because of being a minority. I grew up in an environment where everyone around me was *Zainichi*. So, of course I feel differences like the ones I mentioned earlier when I speak with Japanese people, but I myself feel stable. Being *Zainichi* is one of the attributes that I take for granted, just like being a woman. However, since there are few people in a position like mine creating art in Japanese society, others tend to focus on my *Zainichi* identity. Yet, speaking from my own perspective, the fact that I am *Zainichi* is not really something I place at the center of my art.

李 晶玉 JongOk Ri

在日朝鮮人三世という立場から、国家や民族に対する横断的な視点を足がかりに制作を展開している。古典絵画の構図や象徴的なモチーフを借用し、マジョリティの文脈や構造にアプローチをかける試みを行っている。

As a third-generation *Zainichi* Korean—a term for ethnic Korean citizens or residents of Japan—Ri uses a cross-sectional view of the nation and ethnicity as a foothold for her work. Borrowing compositional and symbolic motifs from classical paintings, Ri attempts to approach the context and structure of the majority.

やっぱり日本にいる人は日本人であるという考えが、なかなか抜けない国だと思うんです。

岩根：私は写真を始めた頃は、本当にストレート写真のことしか信じていなくて、いわゆる技巧的なものとか、演出しているものは、写真じゃないと思っていたところがあるんです。それが大きく変わったのは、このカメラ（コダックサーカット：回転式のカメラで、カメラ下にあるぜんまいで駆動する）を使い始めてからです。これはカメラが回転しながら撮影して長い写真が撮れるのですが、つまりこの写真はフレーミングがないんです。今まで私が写真だと思っていた、フレームを切るということではなくて、始まりと終わりを決めるんです。どこから撮って、どこで終わるかということだけを決めるんですけど、これも写真。だけど、回転する間の時間もあって、時間も少し流れているんです。でも、写真だと言える。だから、このカメラを使い始めてから、空間を共に写すみたいな感覚を得て、そこから、手法に関しては、すごくオープンになったんです。感じることを表現するにはどうしたらいいか、ということにフォーカスするようになりました。それから、こういう赤いライトを使うとか、様々な手法で撮るようになったんです。

岩井：ストレートな写真の主題から、時間的なものや、空間的な広がりを持つようになってきているんじゃないかなと。

岩根：それは、福島からハワイに渡った唄が自分の中でテーマだとはっきりしてきた時に、そこに流れている時間や、100年を経て、今、ハワイのこの盛り上がりが目にあること、その場にて自分が感じるものを写真にするにはどうしたらいいんだろうと考えていて、このカメラで撮っているうちに、知るものが大きくなっていった。でも、私は写真家だから、写真での表し方を考えて、たどり着いたということもあります。だから、少しずつプロジェクトが進むにつれて、様々なやり方を試すようになりました。挙句に映画をつくったり。この福島の移民の人が伝えた唄を追いかければじめたら、ストレートな写真だけでは手に負えなかったんです。

岩井：では、テーマによって手法が引っ張られたという感じもあるかもしれないですね。

岩根：そうですね、そこにある「時間」ということをどうしたらいいだろうというのは、すごく考えました。

岩井：お話を聞いていると、岩根さんが、もともと海外ルーツの人たちの文化や生活に興味を持っていたわけではなくて、直感的に興味を持ったものを追い掛けていったら、たまたまそういう世界が開けていったように感じました。とはいえ、以前にもお話しされていたように、今の日本にいる移民コミュニティから、文化的な差異も含めた興味深さみたいなものが見えてくるという直感はあるんですよね？

岩根：本当にそれを感じるようになったのは、コロナ禍になってからです。今、生きて自分が住んでいるこの国で、こんなことがまだあることを知る。それまでにも存在していた問題だったとは思

うんですけど、それが自分にはちゃんと見えていなかったんです。

岩井：そういう視点は、ひょっとすると、高校生で海外生活をされていた経験にもつながるのではありませんか？

岩根：私、子供の頃に家を出て、その後は祖母と暮らしたり、家出したまま1人でアメリカの高校に行ったんです。だから、そういう意味では、1人で知らない土地で暮らしはじめた人たちのことに、すごく惹かれたのだと思います。今思うと最初にハワイの移民の人たちのことを、ぼろぼろになったお墓で見つけた時にも、感覚的に惹かれていたのかもしれないです。

岩井：若い時に、自分ではどうにもならない社会に反抗というのもあったんですか？

岩根：そうですね。私は20代でハワイに通うようになるまでは、怒りのエネルギーで生きてきたと思うんです。それが本当に強くて…。それが、ハワイの人たち、移民の人たちと触れ合うことによって、あとはあんな溶岩を見ることによって、静まっていったのだと思います。

岩井：IMM東京というプロジェクトは、もともとは日本に住んでいる海外の人たちの文化的背景を、多くの人に知ってもらうという意図があるのですが、ただ、それを伝統文化やそういうものだけでまとめてしまうと、今の彼らの生活が見えてこない。それに対して、実は私もいろいろと試してみましたが、コンテンポラリー・アートの形式を参照することが効果的ではないかと思っています。そういう中で、岩根さんが招かれて作品を発表するということに対して、何か感じることはありますか？

岩根：そう言われてみると、私はそのように設定されたところに参加させてもらうのは初めてです。日本には岩井さん以外に、そうした試みを行なっている人は少ないのではと思います。だから、今、本当にこれだけたくさんの移民してきた労働者の人たちに、実際の生活を支えられているのに、そういう意識があまりないですね。やっぱり日本にいる人は日本人であるという考えが、なかなか抜けない国だと思うんです。そういう意味で、すごく大事なことだと思います。そうやって提言して、質問を投げかけないといけないですね。

I think it is difficult for the Japanese people to notice that it is not only Japanese people who are living in Japan.

Iwane : When I started photography, I really believed in straight photography only, and I used to think that anything that was so-called "technical" or "staged" was not truly photography. What really changed for me was when I started using this camera, Cirkut (the Kodak Cirkut is a rotating camera that moves with a spring under the camera). It shoots while the camera rotates and results in a long picture like this one,



岩根 愛 / Ai Iwane (Photo by Akinari Nishimura)

which is a photograph without the process of framing. Shooting with this camera wasn't about framing the scene, which I had always thought of what photography was about, but instead, determining the beginning and the end. I just decide where to place the camera, and where to start and end. There is also a short span of time that flows during the rotation. But still, it is a photograph. So when I started using this camera, I acquired the feeling of capturing the entire space together with me, and from that point on, I believe I became very open-minded about my methods.



写真展「FUKUSHIMA ONDO」(tette, 福島, 2020)
での対談風景
Photography exhibition *FUKUSHIMA ONDO*
(tette, Fukushima, 2020)
(Photo by Akinari Nishimura)

Iwai : So, you were able to create a sense of time and spatial expansion from the straightforward subject matter of your photographs?

Iwane : Yes. When I clearly acknowledged that the theme of this body of work was going to be about the song that went to Hawaii from Fukushima, I thought about the time that flowed within that story, as well as the fact that the extreme excitement in front of me now in Hawaii is happening 100 years after the song had traveled, and I started to think of how to put the things I was feeling there into a photograph. There were many things I learned since I started photographing with this camera. Then I began to experiment with various methods as the project progressed little by little. I even ended up making a movie. Since I started to follow the song of the immigrants from Fukushima, I could no longer handle it with just straightforward photographs anymore.

Iwai : So you feel that your technique was acquired because of the theme?

Iwane : Yes, I do. I thought a lot about what I should do with the "time" that was there.

Iwai : Listening to your story, I have the impression that you weren't originally interested in the culture and lifestyle of people with overseas roots, but rather that you followed your intuitive interest and that such a world just happened to open up to you. But, as you mentioned the other day, did you sense that the immigrant community in Japan today could bring interesting aspects to its cultural differences?

Iwane : It wasn't until we entered the coronavirus epidemic that I really started to feel so. To know these things still exist in this country where we live and work now. These problems must have been here from before, but I couldn't see them at that time.

Iwai : Could that kind of perspective be possibly connected to your experience of living abroad as a high school student?

Iwane : I left home when I was a child, and after that, I lived with my grandmother and went to high school in the United States by myself while I was away from home. So, in that sense, I think I was really attracted to people who started out alone in a strange land. Now that I think about it, when I first found the Hawaiian immigrants in their tattered graves, I may have been also attracted to them on a somewhat sensory level.

Iwai : When you were young, was there a sense of rebellion against a society that you had no control over?

Iwane : Yes, I did. Until I started going to Hawaii in my twenties, I think I had lived my life with the energy of anger. It was really strong... I think it had calmed down by coming into contact with the Hawaiian people and immigrants, and also, by seeing the lava that was like it.

Iwai : The original intention of the IMM Tokyo project was to let as many people as possible know about the cultural background of people from overseas living in Japan. But when you present them with traditional culture or things like that, you really can't see how their lives are today. I actually have tried various ways to deal with this, and I think it is effective to refer to the format of contemporary art. In this context, what do you feel about the fact that you were invited to present your work this time?

Iwane : Now that you mention it, I notice this is the first time I have been invited to participate in such a context. I think there are very few people in Japan, other than you, who look at my work from that kind of perspective. That is probably why we don't have much awareness of the fact that so many immigrant workers are actually supporting our lives. I think it is difficult for the Japanese people to notice that it is not only Japanese people who are living in Japan. In this sense, I think it is a very important topic. We need to speak about these issues and continue asking questions in this way.

岩根 愛 Ai Iwane

1975年東京都生まれ。2006年以降ハワイにおける日系文化に注視し、移民を通じたハワイと福島の関わりをテーマに制作を続ける。2018年、初の作品集『KIPUKA』（青幻舎）を上梓。第44回木村伊兵衛写真賞、第44回伊奈信男賞受賞。ドキュメンタリー映画『盆唄』（中江裕司監督作品、2018年テレコムスタッフ）を企画、アソシエイト・プロデューサーを務める。Born in Tokyo, in 1975. Since 2006, Iwane has focused on the culture of the Japanese community in Hawaii, and until now, she has continuously examined the relevance between Hawaii and Fukushima from the aspect of immigration through extensive research and fieldwork. Iwane published her first book *KIPUKA* (Seigensha Art Publishing, 2018). She was awarded The 44th Kimura Ihei Photography Award and The 44th Ina Nobuo Award. Iwane was an associate producer of the documentary film *Bon-uta* (directed by Yuji Nakae, 2018 Telecom Staff).

いわゆる「作品」の形態とは 異なる形のアウトプットをあえて設えて、 そこで混ざる。

高山：2014年の秋頃から難民の方がものすごい勢いでヨーロッパに入ってきて、特にシリアやアフガニスタン、それからアフリカからもたくさん来て、街の様子が少し変わってしまうくらいでした。実際、個人的に付き合いのある難民の人たちにインタビューすると、とんでもない話がたくさん出てきます。少し誤解のある言い方かもしれませんが、聞いていてこんなに心揺さぶられる話は他にありません。こんなことが世の中にあるのか、と。彼らはとんでもない経験をしてきています。ただ、それから少し距離を持って聞いてみると、ほとんど楽しんでしまっているように感じることもあります。それは、ある種の難民ボルノのようにも思えます。

岩井：聞く側がね。

高山：聞く側が、消費もしくは鑑賞の体験としてそれをある種の快楽をもって味わっている状況があると思っています。そういう話は求められてしまうことが多く、たくさんの人が聞きたがって、流行っているのではないかと。問題は、舞台上で難民の人たちはこんなに苦労しているんだということが、ひたすらに消費され展示されていくと、だんだんその問題が固定化していってしまうように思います。人は、いろんな仮面を被ったり外したりしながら生活をしているのに、難民の人にその話ばかり求めると難民でしかいられなくなるのではないかと。彼らにインタビューしながら少しずつ信頼関係を築いていくと「難民としての優等生を演じるのはまっぴらごめんだ」というのが彼らの本音でした。母国では高校教師をしていたのに、誰もそのことには興味を持ってくれないと。むしろ自分が苦労した話を求められるから、ついサービス精神で話してしまう人もいます。それだったら、彼らが持っている「知」や知恵をこちら側が学ばせてもらうことで、彼らは難民というマスクを一瞬外すことができるし、受け入れる側もこういう知恵があったんだと気付くことができる。そこに知の体系のある種の構造やメカニズムが変わる瞬間があるんじゃないかと思っています。難民ボルノではない、隠れた彼らの「知」や知恵といった本当にシェアできるものに光を当てて注目してみたいというのが、今までやってきたスタンスです。

岩井：先ほど高山さんから作品のフィールドが都市であるということを伺いましたが、都市というのは本来は様々なことが起きる場所ですよ。それは、例えば「3.11（東日本大震災）」の時も、北関東や東京の人たちでさえも、もしかしたら自分たちは難民になるかもしれないという恐怖を持っていたり。あるいは、今のコロナ禍によって感染者でないうちは傍観者でいられるけれども、自分が感染してしまうとたちまち当事者になってしまったりと、役割がどんどんチェンジしていくようなことが都市生活の中で起こり得るというのは、平穩を装う東京では考えにくいと思っていたんですが、そうとも言えなくなってきましたよね。

高山：はい。新型コロナウイルス感染症も今、本当に渦中ですが、私はコロナや震災以前から、それによって影響を受けるような活動はしてきていませんでした。つまり、劇場で人が密に集まっ

て舞台を鑑賞するということとは違った活動をこれまでやってきました。だから、実はあまり痛手を受けていません。自分でもびっくりするくらいです。これは誤解を恐れずに言うと、かえて活動の余地が広がっています。こういう危機が来ると私はどうもチャンスが増えてしまうところが正直あります。その一方で、社会的な危機や人の不幸などを栄養にして自分は作品をつくり、それによって様々な人に作品を見てもらえる機会を得ているのかもしれない、と良心の呵責みたいなものを感じる時もあります。これは、なぜ私がマクドナルドでプロジェクトを行うのかという質問にも通じます。劇場や美術館に足を運べる人びとの層というのは、ある程度決まっていると思います。つまり、難民問題を演劇あるいは展覧会で扱う場合、来場者のほとんどは難民問題に関心のある人ばかりだと。「難民問題を何とかしなくちゃいけませんよね」というメッセージを発したら「そうだね」という人がほとんどだということです。でも実は、そういうところに来る人は、お金や時間、またそういうことを理解できる知性のある人に限られているんじゃないかと思います。一方で「難民問題、ふざけんな。そんなものは俺らに関係ないよ」という人は、劇場や美術館にあまり行けなかったり行きたくない層だったりします。今の芸術やアート作品には、そういう人たちにアクセスする回路があまりにも乏しいように思います。そこで、そういう人へのアクセス方法を考えると、実際に都市に出てどこかのコミュニティーと協働したり、修学旅行のような形態で行うことで参加してくれる人もいるかもしれない。いわゆる「作品」の形態とは異なる形のアウトプットをあえて設えて、そこで混ざる。普通の美術や演劇を本当に受容できる観客と、それとは全く縁のない、今まで触れることもできなかったような人が混じるような場が重要だと思います。



高山 明 / Akira Takayama
(Photo by Akinari Nishimura)

We need to set up ways of output that are different from the format of so-called "artworks," and jump in there ourselves.

Takayama：Since the fall of 2014, refugees especially from Syria, Afghanistan, and Africa have been coming into Europe at an incredible rate, to the extent of even changing the cities. When I interviewed refugees that I had personally known, I found out a lot of crazy stories. It may sound a bit misleading, but I had never heard such heart-breaking stories in my life. I wondered if there was such a thing in the world. They have been through a lot. However, when I listened to them from a distance, I sometimes felt as if I was almost enjoying them. Then it seemed to be a kind of refugee porn.

Iwai：Those who listen to those stories, right?

Takayama：Yes, I felt there was a situation where the listeners were experiencing a kind of pleasure in it as an experience of consumption or appreciation. Such stories are often sought after, and I think that many people want to hear them, and



作品《バベル ― 都市とその塔》を前にしての対談風景 / A conversation in front of *Babel - The City and Its Tower*
(Photo by Akinari Nishimura)

they are becoming popular. The problem is that when the stories of refugees are consumed and displayed on a stage, it seems to me that the problems become more and more fixed. People live their lives with various masks on and off, but if we only ask refugees to talk about the stories of being refugees, I think they will only be refugees. As I interviewed and gradually built up a trusting relationship with them, they told me they never wanted to play the role of an "honor student" as a refugee. One of them used to be a high school in their home country but told me no one showed interested in that fact. Instead, they were always asked to talk about their own hardships, and some of them end up talking about it as a service. If that's the case, we should learn from their "knowledge" and wisdom, so they can take off the mask of being refugees for a moment, and the people who listen to their stories can realize they have this kind of wisdom. I think it is in such moments that the structure and mechanism of the knowledge system can change. My stance up to now has been to shine a light on things that are not refugee pornography, but things that can be really shared, such as the hidden "knowledge" and wisdom of these people.

Iwai : You mentioned earlier that the field of your work is in the city, and a city is a place where many things happen. For example, in the aftermath of 3.11, even people in the northern Kanto area and Tokyo were afraid that they might become refugees. Or, you could still be a bystander while you are not yet infected by the coronavirus under the current pandemic, but once you become infected, you immediately become the

one who suffers. I used to think that roles would never constantly change like this in urban life, especially in Tokyo, but it seems that's no longer the case.

Takayama : Yes. We are really in the midst of the coronavirus pandemic now, but even before this pandemic and earthquake, I was always in activities that would not be affected by those things. In other words, I had never been involved in activities where people closely gather in theaters to watch a performance. So, in fact, I haven't really been hurt much by the pandemic. It's to the extent that I'm surprised to myself, too. If I may say without the fear of being misunderstood, there actually is more room for activities. To be honest, when a crisis like this comes, I tend to take more chances. On the other hand, there are also times when I feel remorse of conscience, thinking that I may be using social crises and people's misfortune as nourishment to create my work and thereby gain the opportunity to have it seen by many people. This also goes to the question of why I do my project at McDonald's. I think there is only a certain demographic that can go to theaters and museums. In other words, if you do a play or an exhibition about refugees, most of the people who come to see it are those already interested in refugee issues. It is the same structure as if we'd speak out and say, "We have to do something about the refugee problem," most of the people who see the play or exhibition would simply say, "Yes, we do." But, in fact, I think that only people with money, time, and the intelligence to understand such things come to such places. On the other hand, the people who say, "Who cares about the refugee problem, it has nothing to do with us," are the ones who can't often come or don't want to come to theaters and museums. It seems to me that the current art scene and artworks are heavily lacking its circuits to access such people. It was when I thought of how we could access such people that I reached the idea of actually going out into the city and collaborating with communities, or plan a school trip to make the people participate. We need to set up ways of output that are different from the format of so-called "artworks," and jump in there ourselves. It is important to have a place where people who are receptive to art and theaters, and people who have never been connected to such culture at all, to be mixed together.

高山 明 Akira Takayama

1969年生まれ。演出家・アーティスト。2002年、演劇ユニットPort B（ポルト・ビー）を結成。実際の都市を使ったインスタレーション、ツアー・パフォーマンス、社会実験プロジェクトなど、現実の都市や社会に介入する活動を世界各地で展開している。近年では、美術、観光、文学、建築、都市リサーチといった異分野とのコラボレーションに活動の領域を拡げ、演劇的発想・思考によってさまざまなジャンルでの可能性の開拓に取り組んでいる。

Born in 1969. In 2002, he formed the theater company Port B, and since then has been producing installations, touring performances and social experiments utilizing urban spaces as a way of engaging with cities and societies across the world. In recent years, collaboration with those from other fields including visual art, tourism, literature, architecture, and urban researches has been the scope of his practice broadening further, and he has applied his theatrical philosophy and methodology to opening up new possibilities in a variety of fields.

CITIZEN MEMBERS INVOLVED IN IMM TOKYO

IMM Tokyo seeks members who can help actualize our projects, thinking about multicultural society while realizing regular meetings, lectures and fieldwork. Here, our staff take a look back at the activities of IMM Neighbors (formerly "IMM Project Member") that began around 2019.

IMM東京に関わる 市民メンバーたち

IMM東京では企画をともに作りあげる市民メンバーを公募し、定例の打合せや、レクチャー、フィールドワークを実施しながら多文化社会について考えてきました。ここでは、2019年頃から活動を始めた市民メンバー「IMM ねいばーず」(旧 IMM Project Member) について、事務局の目線から振り返ります。

「ねいばーず」は何者になりうるのか

今井 代 2020年度 イミグレーション・ミュージアム・東京 事務局

IMMねいばーず（以下、ねいばーず）とは、「多文化社会 × アート」というキーワードに興味を持って集まった市民チーム（※発足当初はIMM Project Member、通称：IPM）であり、国籍や所属、居住地、参加背景も様々である。「ねいばーず（Neighbors）」は英語で「隣人」の意。多文化社会に向けて、大それたことではなくても、日本に暮らす海外ルーツの方々の「隣人」としてならば、何かできることがあるのでは。そうした気持ちが込められている。2021年1月に実施された定例ミーティングの日、メンバーたちとこれまでの歩みを振り返る時間を設けることにした。本稿では、そこで語られた2020年度の出来事を中心に書いてみようと思う。

新型コロナウイルス感染症の影響を受け、予定していた活動が中止となり、何の方針も見えなかった2020年4月、それでも歩みを止めてはならないと「ロジックモデル」の手法を活用し、改めて自分たちの活動を見直す講座を2回実施した。その後も、顔合わせを兼ねたミーティングを定例化し、メンバーの中から「多文化社会」に関連する話題を報告してもらったり、発

展させたい企画を議論したりした。秋頃には、IMM東京がオンライン美術館を開館する方針が定まり、さらに活動のギアが上がっていく。この時期には、感染予防対策をしながら足立区千住のまちをめぐり、地域の多様性やアートに触れる「千住ツアー」を有志で開催するなど、緩やかな時間を楽しむ空気感も生まれていた。

11月頃には活動も佳境。オンライン美術館に向けた様々なコンテンツ制作に取り組んだ。「気づいたら、色々やっていたね」というのが、メンバー、事務局満場一致での実感だった。正直、年度の初めには、活動から離れてしまう方々も多いのではという心配が事務局内にはあったが、結果的に、ぐっと深く関わるようになったメンバーが増えた2020年となった。なぜ、オンラインばかりで先が見えない状況でもモチベーションを保つことができたのか、率直にねいばーずたちに聞いてみた。



IMM 東京が実施したレクチャー / A lecture held by IMM Tokyo

Who can “Neighbors” become?

Michiyo Imai Staff Member, Immigration Museum Tokyo, FY 2020

IMM Neighbors (hereafter, “Neighbors”) is a team of citizens of varied nationalities, affiliations, places of residence, and experiences that are brought together by their interests in the keywords “multicultural society and art.” In moving towards a multicultural society, the team’s name carries the feeling that when you become the neighbor of someone with roots overseas who lives in Japan, there may be something you can do for them, no matter how small the gesture. During one of our regular meetings in January 2021, we set aside time to reflect on our history with the members of Neighbors. Pulling from that meeting, this article focuses on what happened over the 2020 fiscal year.

In April 2020, when our planned activities were cancelled due to the novel coronavirus pandemic and no clear path could be seen, we held two classes to rethink our activities by making use of the “logic model” approach, knowing that we could not simply stop moving forward. After that, we held regular meetings to get to know one another, asking members to report on topics related to multicultural society and to discuss projects they would like to develop. Around autumn, IMM Tokyo decided on opening its art museum online, and our activities began to pick up speed. During this period, while taking preventative measures against the virus, the desire to enjoy a slower pace was in the air as we held events like a volunteer-led tour of the Senju area of Adachi City for participants to experience the diversity of the area and its art.

Around November, our activities hit a high point. We worked on producing various contents for our online museum. Looking back at that time, all of our staff and our members felt that they had their hands busy with various things before they knew it. In all honesty, at the beginning of the fiscal year, there had been concern amongst the staff that many people would stray from our activities, but in actuality, the number of members who became deeply involved increased in 2020. We asked our Neighbors directly why they were able to stay motivated even when everything was online and the future was unclear.

Upon asking, a voice replied through the screen: “Why would you ask something like that?” Others chimed in: “I understood that not knowing what’s to come was unavoidable, so from the start, I had switched my focus to what I could do now.” “I enjoyed hearing various conversations at the monthly meeting.” “It was exciting to meet others thinking

すると、画面越しに「なんでそんなこと聞くの？」とも言いたげな表情が返ってくる。いわく「先が見えないのはやむを得ないと分かっていたので、今できることをやろうと最初から頭を切り替えていた」「月1回のミーティングでは、色々な話が聞けて楽しかった」「同じようなことを考えている人に初めて出会えて、刺激的だった」「安心して、思いついた意見を自由に言える場になっていた」「一昨年、海外から日本に来たが、日本での知り合いができ、大学の同級生とは交わせない話ができて日々の励みになった」とのこと。なかには転職にあたり、ねいば一ずの活動と被らないように、わざわざ土日休みの仕事を選んだという方もいる。あるいは、遠方に住んでいるがゆえに「たまに参加する程度で」と考えていたが、オンラインになったことでいつの間にか活動の中心を担う1人になった方も。ほかにも、海外在住の方や、小さなお子さんのいる方も、場所の制約を超え、それぞれの関心事にまっすぐに活動する充実感が、画面越しからもひしひしと伝わってきた。

これは、あくまで筆者の考えだが、ここに集ったメンバーたちは「多文化社会に関心を持つ人びと」ではなく「自分自身のためにも、切に多文化社会を求める人びと」なのでは、と感じている。

実はこの振り返りの前に、あるメンバーの発案で「あなたにとってのホーム (Home) って何？」という問いについて語り合うワークショップの実験を行っていた。言葉で語ってもよいし、写真や絵など自分なりの“作品”を通じて語ってもよい、という設定である。

そこでは自然と、各自が育ってきた背景がないまぜになって語られた。現在はたまたま日本にいても、幼少期から様々な国で暮らし、他にも自分の「ホーム」と思える場所がある人。自身は日本で生まれ育っているが、世代を遡れば海外にルーツがある人。日本の一つの地域で暮らし続け、親族も近くにいる環境で育ってきた人。それぞれの抱えている背景も様々で、モヤモヤと言葉にできないものも多かった。しかし、アートを介らせているからか、あるいは、すでに正解不正解のない事象を共有してきたメンバーだったからか、モヤモヤの漂う時間でさえも安心して過ごさせていた。

この時、彼／彼女らは意識的にか無意識的にか、こうした場を自分自身も求めて集っているのではと思ったのだった。その上で、それを自分だけで占有するのではなく、必要だと願う人びとにひらいていきたいと活動しているのではないか。見方を変えれば、IMM東京が持つコンセプトやねいば一ずの活動には、ある種のここにしかない個性があり、それを求めている人びとを深く惹きつけているのではと感じる。

ねいば一ずの存在は、IMM東京にどのように作用していたのだろうか。一つは、多文化社会をテーマにした事業の枠組みに“広がり”と“あたたかみ”をつくっていたということだ。ねいば一ずは、時にオンライン美術館で実施された別企画とのコラボにも挑戦してくれた。国内で活動する団体とのトークセッションでは司会進行を務め、事前の打合せや台本づくりまでを担い、事務局だけでは実現のできない話題の広がりや団体との関係を育んでいた。ある



千住地域をめぐる「千住ツアー」の様子
(仲町の家) /
A view of “Senju Tour” around
the Senju area (NAKACHO House)

the same thing as me for the first time.” “This was a safe space where I could express my thoughts freely.” “While I came from abroad to Japan the year before last, making friends in Japan and getting to know my university classmates became a source of daily encouragement.” There was even one person who said that when they changed jobs, they chose one with weekends off so they could participate in Neighbors. Another person, who lived far away and thought they could only participate once in a while, became one of our core members as things moved online. In addition, those living overseas or those with little children can feel the satisfaction of participating directly in the things that interest them through their screens, regardless of where they might be. This is just my opinion, but I feel that the members gathered here are not “people interested in multicultural society” but rather, people earnestly seeking a multicultural society for themselves.

Actually, before that reflection session, we conducted an experimental workshop at the suggestion of a member surrounding the question: what is “home” to you? Participants could respond through words, or through their own artwork, such as photos or drawings. Over the course of that workshop, the backgrounds of each person’s upbringing wove together naturally. A person who happens to be in Japan now, but has lived in various countries since childhood and has other places they can think of as “home”. A person born and raised in Japan, but with generational roots overseas. A person who has always lived in one area of Japan, raised in an environment with relatives nearby. With each person having a unique background, there were many things that could not be put into words. Yet, perhaps because of art intervention, or perhaps because these members had already shared moments where there was no right or wrong answer, we were able to spend that



オンラインミーティングの様子 / Inside an online meeting

いは、公募で集まった作品の一部を紹介するコーナーでは、アートは好きでも人前で作品について語ることは初めてというメンバーばかりであったが、精一杯に自分なりに作品と向き合い、背景を想像しながら言葉にして伝えたことで、作者からは「自分の作品について、こんなによく見てくれて、語ってくれて本当にうれしい！」というあたたかな声が寄せられた。もう一つ、これは筆者が特に思っていたことだが、ねいばーずという存在が事務局の支えになっていた。「色々と困難はあるけれど、ねいばーずも頑張っているし、我々もできることをしなきゃね」という空気が、自然とIMM東京を動かしていた気がするのだ。

オンライン美術館での「IMMねいばーず」のページの見出しは『わたしたちが「つなぐ」こと：多文化社会に関心のある市民メンバーが、この美術館の気になる一枚を紹介したり、さまざまな実験をおこなったり…。』とある。2020年はまさに、一体自分たちは何者で、何ができるのかを、ひたすら実験し、確かめてきた期間だった。

次はどんな人びとに出会い、どんな対話が生まれるのか。決してアートのプロでも、多文化の専門家としてでもない、一人の「隣人」たる個として出会い、共にあり続けようとする姿勢そのものが、IMM東京の今後をつくる源泉につながっていくと信じている。

time with peace of mind, even when the mood became heavy. It was at that time that I thought these people, whether consciously or unconsciously, gathered in space for themselves, too. On top of that, rather than occupy that space by themselves, I felt that these people were working to open it up to those that need it. From a different point of view, I feel that the concept of IMM Tokyo and the activities of Neighbors have a certain character that can only be found here, deeply attracting those who seek it.

How did the existence of Neighbors influence IMM Tokyo? For one, Neighbors brought a sense of warmth and broadened the frame of our operations that centered on the theme of multicultural society. Neighbors also stepped up to collaborate on other projects that were sometimes held as part of our online museum. Neighbors helped chair a talk session with other organizations active in Japan, took charge of preliminary meetings and script writing, and cultivated a wide range of topics and relationships with organizations that would not have been possible with our office alone. In another instance, Neighbors who liked art but were new to talking about artwork in public did their best for a special corner that introduced artwork gathered from an open call. By looking into the artwork and imagining its background in their own way, these Neighbors garnered a warm response from an artist who said, “I’m so happy to have my worked seen and talked about so well!” Further, from my own perspective, the existence of Neighbors was a source of support for our office. “There are many challenges, but we Neighbors are also doing our best. We all need to do what we can.” I feel that words like these created an atmosphere that pushed IMM Tokyo forward in a natural way.

The header of the IMM Neighbors page in our online museum translates as: “What we connect: Members interested in multicultural society introduce their favorite artwork in the museum and conduct various experiments…”. The year 2020 was exactly when we were experimenting with and affirming who we were and what we could do. Who will we meet next, and what kind of dialogue will arise? I believe that the key to the future of IMM Tokyo lies not in art professionals or multicultural experts, but in meeting our neighbors as individuals and striving for continued unity.



「フィリパピポ!!」 / *Filipa-pi-po!!*
(Photo by Ryohei Tomita)



「銭湯哀歌、人情屋台、消えゆく昭和 〜ケント・ダールが歩いた千住〜」 / *Bath house elegy, humane pull-car, and vanishing view of Showa era: Senju, the town where Kent Dahl had walked around*
(Photo by Ryohei Tomita)



高山 明《バベル ― 都市とその塔》 / *Akira Takayama Babel - The City and Its Tower*
(Photo by Takeshi Yoshida)



「Their history, to be our story」 / *Their history, to be our story*
(Photo by Ryohei Tomita)

千住がパリ？ —— IMM東京の驚きと歓び

熊倉純子 アートアクセスあだち 音まち千住の縁 プロデューサー / 東京藝術大学教授

本書は岩井成昭が10年以上にわたって構想・実践してきたプロジェクトの集大成として、2020年に東京足立区で開催予定であった「美術館・わたしたちはみえている ― 日本に暮らす海外ルーツの人びと」のオンライン版の内容を中心にまとめたものである。しかし、実は岩井のIMM東京は千住でほかにも様々な活動を行っている。ここでは千住におけるその展開をすこし振り返っておきたい。

2013年に「アートアクセスあだち 音まち千住の縁（通称：音まち）」は、それまで小金井を中心に活動していたIMM東京を千住にお招きすることとなった。千住を拠点に足立区内に新しい縁を紡ぐことを目指して2011年に始まった「音まち」だが、音楽家・大友良英と風を揚げたり、作曲家・野村誠とだじゃれ音楽を始めたり、現代美術家・大巻伸嗣とシャボン玉を飛ばしたり、ふわつとしたことを多く手掛けていたので、すこしごりつとしたことをやりたかったような気がする。こうして「音まち」は、在留外国人の人びとと「縁」を結ぶことが活動の目的の一つとなった。

足立区はフィリピン系の人びとの人口が多い地域である。ある留学生のリサーチからカトリック梅田教会に集まるフィリピーナたちとご縁ができて、彼女たちとの共同プロジェクト「マキララ」（2016-2018）が立ち上がった。「知り、会い、踊る」を意味するマキララでは、岩井とも親交の深い演出家・阿部初美と建築家・佐藤慎也がフィリピーナたちのオーラル・ヒストリーを映像展示に落とし込んだ。また、学生たちとフィリピーナたちの演出による無国籍パーティー「フィリパビポ!!」が開催された。

また、岩井の3年越しのプロジェクト「銭湯哀歌、人情屋台、消えゆく昭和 ～ケント・ダールが歩いた千住～」(2016)は、千住に長く暮らすデンマーク人のジャーナリスト、ケント・ダール氏が散歩の途中に撮りためた写真を、岩井のキュレーションで古民家に展示したものである。そのアーティスト・トークでケントさん曰く、「千住はパリに似てる!」。そんな、どこが…と訝る私に、「だって、道で食べ物を売っていたり、商店主が常連さんを大事にして、おしゃべり長いじゃない」。うーむ…パリに6年も住んだ私だが、言われてみれば…。ずけずけとものを言うところもパリっ子和千住っ子の共通点か。IMM東京は、そんな新たな視点に気づかせてくれ、世の中がすこしカラフルに見える歓びを与えてくれる。

熊倉純子

東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科長。アートマネジメントの専門人材を育成し、「取手アートプロジェクト」や「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」など地域型アートプロジェクトに携わりながら、アートと市民社会の関係を模索し、文化政策を提案する。

Senju as Paris? The Wonder and Joy of IMM Tokyo

Sumiko Kumakura Producer, Art Access Adachi: Downtown Senju - Connecting through Sound / Professor, Tokyo University of the Arts

This publication highlights contents from the online version of “Art Museum • ‘Seeing Us: Living in Japan with Roots Overseas’”, an exhibition that originally planned to open in Adachi City, Tokyo in 2020 as the culmination of projects that Shigeaki Iwai has been planning and implementing for over ten years. However, Iwai’s IMM Tokyo is actually involved in various other activities around the Senju area of the city. Here, I would like to take a look back at those developments.

In 2013, Art Access Adachi: Downtown Senju - Connecting through Sound Art (“OTOMACHI PROJECT”) invited IMM Tokyo, which had been active mainly in Koganei City, to the Senju area. After beginning in 2011 with the aim of weaving new connections in Adachi City and the Senju area in particular, OTOMACHI PROJECT has achieved many activities — from kite-flying with musician Yoshihide Otomo, to a music festival of puns with composer Makoto Nomura, and flying soap bubbles with contemporary artist Shinji Ohmaki — so, we felt it was time for OTOMACHI PROJECT to expand past that comfort zone. With that frame of mind, making connections with non-Japanese residents became another goal for OTOMACHI PROJECT.

There is a large population of Filipino descent living in Adachi City. From the research of an international student, we were able to connect with a group of Filipina women at the Umeda Catholic Church and create a collaborative project called “MAKILALA” (2016-2018), meaning to “Know, Meet and Dance”. In this project, Hatsumi Abe, a director with a close relationship to Iwai, and architect Shinya Sato incorporated the oral history of those Filipina women into a film exhibition. Students also worked with the Filipina women to direct a nationality-free party called “Filipa-pi-po!!”.

In addition, in Iwai’s three-year project titled *Bath house elegy, humane pull-car, and vanishing view of Showa era: Senju, the town where Kent Dahl had walked around* (2016), Iwai curated an exhibition in an old folk home of photographs taken during the walks of Danish journalist Kent Dahl, a long-time resident of Senju. In his artist talk, Kent said, “Senju is like Paris!” While I was bewildered by the comment, Kent explained: “I mean, people sell food on the street, shop keepers take good care of their regulars, and chats take time, right?” Hmm… if you ask me, as someone who lived in Paris for six years… could it be like how Parisians and “Senju-ites” both speak frankly? IMM Tokyo makes us aware of such fresh perspectives and brings us the joy of a more colorful world.

Sumiko Kumakura

Dean of the Graduate School of Global Arts, Tokyo University of the Arts; Professor in Art Management and Cultural Policy Studies. Producer of numerous regional art projects such as the Toride Art Project and Art Access Adachi (OTOMACHI PROJECT).

IMMIGRATION MUSEUM TOKYO 10TH ANNIVERSARY BOOK

令和3年3月

監修： 岩井成昭（イミグレーション・ミュージアム・東京 ディレクター）
編集： 群落【櫻井駿介＋村田萌葉】
編集協力：熊倉純子
特定非営利活動法人 音まち計画【吉田武司、長尾聡子、西川 洸、櫻井駿介、今井迪代、三浦万奈、木村 楓】
森本菜穂
デザイン： 竹内公啓
翻訳： ラナ・トラン
河西香奈（p48-p55 / インタビューテキスト）
西川 洸
印刷： 株式会社グラフィック
発行： 公立大学法人 秋田公立美術大学
〒010-1632 秋田県秋田市新屋大川町12-3
Tel：018-888-8100（代表）
Fax：018-888-8101
Web：https://www.akibi.ac.jp/

March, 2021

Editorial Supervisor：Shigeaki Iwai (Project Director, Immigration Museum Tokyo)
Editor：gunraku [Shunsuke Sakurai + Moena Murata]
Editorial Cooperation：Sumiko Kumakura, OTOMACHI PROJECT (NPO) [Takeshi Yoshida, Satoko Nagao, Yu Nishikawa, Shunsuke Sakurai, Michiyo Imai, Mana Miura, Kaede Kimura], Naho Morimoto
Design：Kimiaki Takeuchi
Translation：Lana Tran, Kana Kawanishi (p.48-p.55 / Interview Text), Yu Nishikawa
Printing：GRAPHIC Corporation

Published by：Public University Corporation Akita University of Art (approved)
12-3 Araya Okawamachi, Akita-City, Akita 010-1632, Japan
Tel：018-888-8100 (Main)
Fax：018-888-8101
Web：https://www.akibi.ac.jp/

本書は、公立大学法人秋田公立美術大学「令和2年度競争的研究費」により印刷されています。
This publication is printed with the support of Akita University of Art (2020 Akita University of Art Competitive Research Grant).

©2021 Immigration Museum Tokyo All rights reserved Printed in Japan

秋田公立美術大学
AKITA UNIVERSITY OF ART

